壬寅

# 日本歳時記

二

春之部

急用閒合

## 眞字引玉篇大成

懐中小本　全一冊

古ノ書ハヨメス字ノ早クヨメル本ナリコレニテ書引ノ本數多アレドモ「偏冠」ワカラヌ字ナドハ甚ダ引ニクシタトヘバ早ノ字ヲ引ニ偏冠ワカラズ何ノ部ニアルヤヲ知ラズ人々是ニ困ルナリ此本ハ偏冠ニテ引ヨキ字ハ偏冠ニテ引偏冠ワカラヌ字ハ字ノ書初メ三畫ヲミルト引ケルゴテゴト畫ヲカゾヘルニ及ハス字ヲ引ニ至テ早シ字ヲ增スコヲビタヽシ煩テ字ノモレタルハナシ平仄ヲ改メ和訓ヲ正シク付テ幾度モ大儒ノ校訂ヲ經テ校行シ世ニ弘ム

## 詩材抜錦

川西洲先生輯　懐中折本紅畦入

唐詩ノ熟字ヲ集ルコト百二十門ニ領テ二千二百句コレヲ撰ハ花月ヲ摸出スルコト声アツテ画來ル如ク詩作ノ妙処ヲ得ンコト妙々書ヲ見テ知ルベシ

## 補正初学指南抄

毛利貞齊著　全

朱引指南唐ノ歴代要覽廿一史大略經書詩文讀法指南ヲ委ク載經文出所ヲ記ルシ都テ初学ノ為ニ成ルヲ集ム早学文ノ眉也附錄禁中ニ行ルヽスベテ是ヲ記ス禁中宮殿圖説ヲアラハシ摂家清花羽林名家其外堂上官位昇進ノ次第八省大々ノ職掌ヲ詳カニシ諸侯方任官ノ次第其外親王御門跡御格式官位神社ノ官職寺院八宗九宗ソレ〳〵委細ニ記シスベテ官職ノコト并ニ唐官相當等クハシク記ス光文章詔語桐江先生エラム処ニシテ五經及左氏傳ノ要語熟字ヲ抜萃シイロハ分ニメ見出スニ便利ナラシム詠物詩唐季嶋撰也終リニ附シテ詩家ニ便リス

唐土ノ始ヨリ明ノ代ニテ代々帝王制度事物ヲ始テ制述シ玉フコト千餘ヶ条ヲ書集メテ其義ヲ詳ニス都テ物ノ始ヲ知ヘシ

周陽原 酒井家藏書記

日本歳時記敘

伊耆氏命羲和欽若昊天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之吏莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世有其人屢改寖精靡有差貸唯如授時勤

民曆家之所未言也如夏小正月令可
謂庶幾乎若夫玉燭寶典月令廣義諸
書亦庶乎爲授民教時之一助然其所
載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也
本邦自古未聞言歲時之明且詳者故
民間往往失其實而錯傳妖妄之說
者居多識者憾焉竊謂教民授時在其
位謀其政者之責而非吾曹之所宜議
然如民生日用雜細事宜雖微賤復可
言豈爲僭上乎不佞夙有志于此然衰
朽之餘齡亶艱考索嘗屬家姪好古令
編録於事之覈實而便乎民用者書之
以和字家姪頗聰慧有編剖之才彼之
攷古訂今關其疑愼言其餘者愜我之
素志書稿屢換而輯録已具於是乎予
暇日逐條再修補之書遂成編矣第恨

聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多註
誤亦不少後之學廣而聞多之君子改
而正之則幸甚
貞享丁卯蒐秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之損軒





目安案時紀例

一此編もとあらむやうもなく
みづから筆にまかせてかき
記せる雑事とも
國朝文字よやうやく
もてさだまるまでひて書はぐきを
いかゝ之を並擬ふべきもあらず
こゝろ之事とおさ〳〵後裔の
ための民間の男女に案時の事
宜をしらしめんためまろがの

一 案時の奏宣を風俗書紙
考へ見るに多くは事始と稱して
年ごとの事ども民里日用の便
世俗其意とを考へ
一 凡そ乃事宜を民里日用の便
書にのせ示すを紙ふかれてもとく
これと志ありきいかにてやあらん
世べし 曾而
奉郷乃民俗より
事のこととりとくまるし

書よせまひらくなり　申初の候よろ
ひ　あるん人をこれと考知へ　今之これ
と主ありさバ贄をするべし　其ものやまひ
ゐるを元旦ゐるの八ツ半ハ供儀或を赤ふう志
つゝ地紙　是弁ハ年ハの事よ
主ぐも今民百よりの集りの八の事よ
年ハまうことなくとバ昭ふみようと志ふ
ぬこれをもとゞと志ふ
一ハ梅と集祖せんるを叔父叔母兄ハ
弟よ命をり志ふれをと弟をしよりすはゞ



ちゝ儀ふれを杜撰よろしつまをくく
うりてたゞよやぬ
かゝるぬまでゐねくまひぐくて書つゞ年
八百ゐの文ぐをもその女ゐ三
をと経くく潮ふれ功と納ゐめ今文爲八
刪補とそゝハはゐよ金書やなまり三文
あれど磨焚そうけをもたものぬたゐ
しゐまバ私ひゞくしきものやうりのこ
ぶゐふうまべこの功ハ納ハり儀志
八たゞよ世次をハうゐ家人ふ伝之次ふ

ちゑさんたなゝ
やーこのとわ
貞享丁卯春夏日

筑州晩出貝原好古識



# 春

損軒先生刪補
貝原好古編録

と初め勧むべし
なよれる者の湯の初めよく発する時と失する
浮て沈とうとこのと教すこと
葉間よりよく書き三月色と変深くの天地ほどよく
万病にく常よく外よく生毎よく虚よく虫一餐と
被て形を緩にて志とせ一めよくして教す
こころを責志よくく骨をろくのなるに至毒
知すれ形ありて実生乃通ずり色よ逆よりきる
肝と中りの夏宜と変をなし
当も緩よいくく毒日就れ乃何園林宇宙宿乃

肝よ拙歩してて滞塩とのべ生乳と育すへ一
久しくく元生しる色事なるて肩宇とくく毒
倉医薬略よいくく毒肝乃胆ずり何ふくく死宇れ
肝の臓よ入ふ舎鉄の肝とくくるとこと祖
とやはんるとを知るくあり
千金方ふいくく毒七中二日 青牛肯を潰く酸味の物と
食するとくふさ甘味とまて脾等と新よ一一
月令廣義抜よいくく次何ら
飲食べくく次何ら

湯よ一すくひ次又無垢衣袈裟とあ
うるまでこと葉すべし
春生海よりいでく森の方毎朝欲こ掬うこの一二百掬
かくとくしく又新水すてゝ欲湯の湯一
掬へ膝の下及足と洗くべし風毒脚
気のうれへのぞく
春雪殿書こいでく雪の方鄰舎をてこよひ衣袈裟と
事ものうれうの中よ家あり人と言ふ
月令廣義よいでく春の方大熱の物を食事一すくを
小蒜及百草のん芽と食べし

## 四月

此条は四月の条の次に移すべし

不同一月三同四月
お雑組同一月お四月
○四月乃異名 画史識月 酒月 称とな旅しつよ○三月
乃和名と睛月しやよ物おそくたるやさ
ゆるさ ようやくふむつひ月しやうを略せり

元日辞典にそく月四元日辞拝千文雑薬洗浴の月令へ
四月也元日八朔日也し記せり唐虞乃時洗の
元日乃名称又此日をこ元と言漢書よ重人考暦
数此四二元しんでうく案の元時乃元日代元旦れへ
三元せいつの玉燭宝典よこゝより今乃世てこ
元を称じて元三と称を後漢代範宣う俗ふ呼
案乃始月の始日代始る生だこ始やいふのきう

後深草院より給はらせ給ふ御
門のそう免をもて
うけてよの始めの
ころひ来人よりきろを
ふこと始めを
ふ
うのことをたしなめ
なりそれも免
かしくそく成就せ
そくたれうけざるもの



○陣中より
宮の初よりそく
衣とも
容儀とかいはくそく
弁被と稽古
ふれいかとよう
概要よりそく
そく母よりそく

寵をとりそく寝ずの間を
参と盟法一髪と
礼服をもて威儀
戒一香をたき天地
年よりそく
父母まで
そく
父母の
婦礼して

礼終く春盛とおもひ
和國乃風俗
てしすく栗柳滿海濱こうんかつらの
米桴をはこぶ
来の賀客
蓬葉八化
うらうらにを
春盛くくなりぬるまへに阿賓
後よりひくべく杖を
春盛細生業
よろ正堂人五年盛とよろこぶ
やうやうやうやう
會初よりくく雑煮と祖先考妣の霊前へ
酒を献ず
あり仕へさの人
祭りまつるにくうてもなし
りうも名所
ようやうやう
雑煮と食ひ屠蘇と飲く飯と楽し酒と

乃ち又洗ひすゝぐべし

一云 製し一重ある饅ようんぶ干なひび乗
海参 牛蒡 薬藕 薬苗 ちめ蔊菜すゝめ蔊菜いを
久方よいりしあめを煎ちう延元氏よう也
土佐日記ともいりしあめを煎ちう
薬ちく菓ちし 含ふ
ふ我 國乃風俗ふく收ちう幸ふ饅と
能ちく我ふ此日ふ二日ふ至ふ 饅とす
をむちをまふと我ふ人へをちうふ
元日ふ膳牙鍋とくふ新我家財記ちうのを
立春ふ日ふ併をちむ幸 服ふ廣義ふ

ふゝちう又屠蘇酒とのむこと東都記ちうのハ
むう人ありて古ふ
黒豆ふ菜一服とて
後ふめ元日ふ水より
付ふく屠蘇酒と号次合ふこれとのめば瘟疫
とやまひなどあらとふ蔕ふよちが
ちと雖ずふ菜ちく邪氣と虎絶ちく人魂と
蔕碎ふむふ
に乃ふちう李時珍ふ説ふ蔕ふ魅鬼乃名
ふ菜ちく悪熱とふ虚劉とふちう又虚時邪ふ

屠蘇を酌ㇲ思遨ぐ屠氏名ともに古の女丁我
朝子ㇲく屠蘇酒とすㇲむるㇲ多酒酒香堂
乃師宇弘仁年中よㇲてめㇲ也ちん
元日ふい屠蘇散と名ひ二日ふい白散と名む
二日ㇲ多服薬ㇲ開ㇲ先ㇲ幼きㇲの老
業とㇲれしい先ㇲ屠蘇とのㇲ老ㇲの人ハ
歳を失えバ酒ㇲく屠蘇とㇲむといふ事ー
対読新書ㇲㇲえㇲ後漢の書曆杜密傳ㇲ
おうてㇲれㇲく獄中ㇲ於ㇲ多ㇲのㇲーが
獄中みㇲく元日ㇲよおひ酒を飲ㇲくㇲ並

又成文幹ㇲ業典
屠蘇無ふい先書。ㇲㇲ新説ㇲ訪ㇲ多把屠
蘇酒歳ㇲ年ㇲれ右乃ㇲㇲ他ㇲり志ㇲな
廬御前ㇲ酒ㇲ多ㇲ屠蘇酒とのむ事必
早幼ㇲㇲむㇲ毛ㇲ幼ㇲ石遊とㇲ成ㇲなり
風正元日ハ一家乃始ㇲ幼ㇲ分とふ
せずんべあるべㇲ幼ㇲ多ㇲ志ㇲ多ㇲ
教ㇲと先ㇲ

ゆゑなり

○今朝夜いまだ明ざる内人ごとに大つごもりと夫
ことの屠蘇の用意とかねてより相ひかまへ
とおもひて人々門戸をたゝきてをのがさま〴〵
をのゝしる事数多しかゝる処
○とある老水をくみのぞむあり世諺四季のいろく
おもやまひいろ〳〵乃十二月の土用ぞのまゝ水
用心せよ乱の方へ井と封じて人を汲せぬ事
日よりよき土瓶小人をして汲ませるなり
立春の日老水と称をして年中の飲水とす
かゝる事をするのひてわざ〳〵水をひかせ
てくみとるものもとのむしろを作りてや
夫よりくめバ老水といふ事なし
○又歯固といひてのらるゝかぐよむよみ
あり後漢書に拾遺記に晋天竺国より射覆大全巻之十七雑字門下
乃繩床よりおろし麦米粉傲体成形一如焼へ竹筒内に納置
戦国これをふくみ出ハをろし粉の熱鏡ゞ形よく似るゝ月
経ありしとかや歯とゝのひて
歯固いはひとらるゝなり
かぐみよむとは何をいふ古今集に入くる
あるよみやかくみよ

そのうえうをみしてせいぐわんをかけすることおよそ
四条より以北えうりきたおよび
もとの國ぐちより大膳職の西の河
大使式部のごとし　以下の奇なり　以下は贊也大膳職の
時延紀主基式のふうに
へりまにごりてよべし　以下の接續と
多世をうくをいのりてわひうんをそうふ
かみのをらるるをしるしとす
そうそうみそぎ元日の暁宇礒をくる事を
隣国民義とそうす　朱雀門紀よりきたるべし
くだりて後伎女のくにも生くまをと添ふるの

國式大使宮長以里の朋友波多野姓氏
賀とのぶへーーえ唐姓氏
のくに賀しるの女ら
む以月い和ふるの人のをとくいたりひなりかひて
やめ、むつひまてえ以月乃和名と
むつき月とのふるこころ
元日の朝賀い滝のる祖より初まりよ
社氏國号と以人えそり我　朝みく西祖と賀
をの紙祖我天皇氏神時より始めそれー
よし為るの和紀主のをり

○今日桃仁湯を服すれハ百邪を辟と歳時記に
みえたり桃ハ五行の精にて百鬼を制す又月令廣義に
ハ元日蒼朮酒を服し赤豆を用て沐浴し疫ハ
剝て焚之瘟を却け邪を辟疫をやまふことなくなり
雜宦の月令に元日梅花酒を服すれハ齢を却
らしむとあり月令廣義に元日椒酒
目吉兆事の文辟邪とし又屠蘇飲の説ハ正行辟瘟
酒新年に命を延とし給ふなり

○今日より民家ハつゞけに松竹を立てし注連縄
とうりそへのちまたの男女繁盛にとてかざる

事あり世俗思ふよするハけふのむかしよりましき
俗としきるべし俵の事なし封戸あるによりて
民戸と号し給れどもむかしハ一町のうちに大史
ほくよありてつと坐てしかバ八の門ありし
ありての中に俵の家居とつくりしハ六門なる
べきれど然その門の前に松竹を立侍り松を
千とせをちぎり竹ハ万代がはりの葉も常なれ
ば年の始の祝ふよしにて侍るべし又寛永れいも
是ハ深山よありて雪霜にも志をも一世をのが
れば注連縄にかざりて切れじともいひ侍るにや

[illegible]
かりそめにいさりてあまのおもと釈ひゆづりえも
かいり釈をもむかくく假寝長縄
縄にかをうくへいろさめおをなをも更ふるのへ
たゝのをそよりもゆるすりへ
志め縄といふ物を左縄にうりて縄うとう張
えねをのをり左を清浄なるかそれをりう
そくめををれかをするこくなり出雲
神乃五代宮をと生活ひ一向志て
走ふるい今乃志免なををりう左を清浄をつくり
よりうく神事の御いかゝ〳〵ずひくるのよりう張
志免をひくるうをもの用乃事をいそひまりふん
をてなゝへ一

ごぼう志免事をいふ物海へかをひ一向宮
ご止物事をかイ紙ひ入れでうりをう次第と
物集屋どとか一ふうの家と
こゝろの家とやうう毛と清乃世までの
志ゝをと女んそ志免乃垂乃よう生まうう松
と幸の始よう志るより時的う簡易免物よ
乃えうり志ゝれどもお経ふて修すう
おもゝずたゞ世張向等の張といく西すへ一
又ひうへ松とやもゝみ志まるまうや嵩
乃事平紙ふ志まよ能志ろうう

きさらきまゐるみやこれてぬりこそのへてゆく縄の
ちしきんき川かは松　さりくるまのるす淡路
孝廉蒙求謂云左縄端者此縄子之義又縄千束縄之重
之義遊道以重為本左表陽使取清静之貌者
表網業可風致其事其事之芒諸也是賀非也
為飾之意以重信為非僻之徳一條縄為其
此之使即治連是也上總八縄よううれ始まることを
ちらくひかりまたにあらふをおそれおり瑞とおほしす
七五三とは川ぞ奇逆八十あはしして義なり
ひかりなるまとなるかくれとも縦するぬとえ

按するに家永附紀に正月一日晝雞を戸上に貼
し葦索をその上にかくるとそのるよしれは
まろこしにもさかなるは此頃にかは東へ倣ひ
きや又川松に麗とりくるまは是昔縄因に
いろく白虎塗板立之戸内邪悪之れと
変するべし
〇今日子晴て八風と考て諸乃善悪と決とる
事あり八風とは八方よりくる風の風南東より
来れは大旱西南より来れは小旱西風は兵乱
何りすこしもそる聚すり是歳代飢饉を役する…

一年一天運と斗淵の風とつゐに知らず仙境
これ好事ならん　作ずべくもあらず
○そこでこゝにみる今日桃源と没捜す幸あり漁
家しい桃林もとくれとをつゐとよ
戸よ掃へうれを春の烟と桃源を尋ねまく
桃源を尋ねまく海平よ霞墨山あり桃林あり
二神まします百鬼を避ける家小今元日桃源と
やこのんの風俗通ぬせ山海経とめ
其あり乃ち　　桃源乃後ろへ



をくび掃をうよ東方朔を西方未にして、
名木の精止仙果もあり味幸氣西方よりく
厭倦千とあり元を以て
邪氣をふさぐ　我　國もく桃源と
くくと作る次とゞ邪氏乃むり休粋
経る芙泉幸氣よあり桃林小立くしの桃林
三とゞくく根津日精女と約歩約ひよ芙泉雪
軍皆逃還　她元桃を周
す氣る事紀を見えく作る助ふるこを皆
家　園ふを桃源をかく

居之桃舟いそく愛君希道泰憂國願年世日の
梅の美う待ちりしそれ旬より郷
住るの春の朱のそれ更ふなく
いそく道迷前聖統服誤遠方來今又学のあるへ
乃桃舟よかんふ修業思時敏進德欲日新
月紙書と用のへしそくそくの日往月來の
元正貢祚大族告辰微陽始布馨無不宜和神
養素之こゝろ今日字と始書す暦よこれと
○今日字と始書す暦よこれと
倍よ策亜ふ始と仮名まて書へし

(紙筆とりそろへ書のつゝそを筆をとりひろめとの又紙觚試
書れは家等の始と試筆とおすることや又紙觚試
験試筆たゝくそもめるしめも策亜ふ始と
仮名まて書へし邦乃ごくそもたる国俗よ
ものあるへ元日乃前後指遣よ少大事
のおねくおるあしそのことそ乃少仮
こそとまとしや延文百そよ大納そ乃元
いかりふ年のとりをおやひまして
そ原のあくそもんん 綿指を集小義多家
あるむ乃うへ一巻をてくけるり
書をあり仮名うへ 五寸集よ紀要へ

宋若之の歳旦よめり

居間無賓客早起但燃爐
案香春風回笑語
一人康壽自長

○常の經史を業とし禮服をまとひ初て
今日よりもとゆひ
そへて一年乃全功を期ん事をねがふ

○世俗よ今日納戸屋中を掃除せず元朝
朱の漫筆をとらず

五雑組に閩の俗元日より五日まで竈土を
塗るに韮にして珍銭によりて石を以て伏て
宝を得るといふこれ古人如願を寶の主とせり
ものせりしかれバ此ころしもかゝるす
ためと見えたり
○七夕帚に飯を炊く竈に燒を蹈ずべし
○今衣史殻の変をうとも是ハ春命を擯ざるよし
月令廣義にみえたり
立春ハ正月の節なり大寒の後十五日斗柄艮に指
と立春といふ立ハ始建也元日ハ正月の日の始也

立春ハ正月の氣の始なり一年の天運是より
はじまる此季ハ津さんでんと改めその始を
祝すべしものこれを四日春盤とすゝめ椒
粥を合し春餅とくらひ桃湯に浴する事が
此傍にし月令廣義に見えたり　立春の
哥　古今集に　貫之
袖ひちてむすびし水のこほれるを春立けふ
の風やとくらん　同集に　二条后
雪のうちに春ハ来にけりうぐひすのこほれる涙
今やとくらむ　同集に　源乃まさ

若き女よそこるも來れ記すことにうれゐ沼や
をゐのそつかれ　新古今集よ撰改大改大臣
みよし野をこえて白雪のあり
市ゝ小春のこさたそ　回集ア像成
きみといなをろこまてもの春よ
ひとりかな
曹松の春の詩よ
孔嗣佳節・濁和氣淑辰・土牛呈宋稼・綵蔬
表年・春臘將回次・紀月建寅・梅花將
柳条・偏思越鄉人

英才林の春の詩ア
五十年間紙白髮後來歲月更若干・余生業
度看新曆又改歲
強顏時八春の詩よ
徘回果晩冰雪少・春到人間草未知・便覺眼前
生意滿・東風吹水綠參ゝ
○春ハ何よりはつ
をろこの黄鶯ハ春をもうれまさりて先ぐ
たゝとるゐん黄鶯ハ人に先ふれるよ
をゐ中なゝてうくひすハさるかす那ふさゝぐ

ひもと多くて園あるやど林ちろれかゝ
かゝざれどそのあう賣すべし煉よいろまで
なくてやまん杜鵑を又多くてあるの
志ぐ〳〵乞地亂乃かゝれる有るべし
○年八始よ事ぞの破魔弓そくる射る沼ろ
世そを武と忘れざるそあるべし但むし年を
猟礼として四月よ園裏みくる射る車八なり
一なり蒼海天皇四月一日弘射殺すと記きり
うといさしむといふ事古きふをみえたり
かくはるをとをうへい年ぬそうかなる

年也女うへをうとを射そりしやふ文脉通考
日本乃部ぬも毎ぬ四月一日弘射殺すと記きり
○又毬杖うつるあり是皮の流化れてたぐ意の殺玖ぞ侍るべき
那昭神年初十云〻十岩淵黄帝取宝丸那
毬を今毬杖是也彼例漢土年始周伴ず
國中女必事彼日本國芸例年始お
毬杖云〻事たり
乃ふ次附會の説なるす是古きふを
○又おされさ女乃わ〻れ是のこそへ〻楽

番をおねをつまくばりてはくるのあり世俗
かのくち地さきのく蚊よくいれぬまで
なひるのより林かくめ小蜂という虫あり
ていば蚊ととるまくよ捕るあるのこといふ薬華
るをどをとんどうかりらみて捨をつけるり
これと校ひくつきあぐまいば蚊ども何とんどうかへ
まれやうれりはくく蚊とおこまてしんめ
こときのことてはきるなり　そんどうの蚊と食うまどみもろうり
○又ふ寺業業と
云同中文六日月乃
陰女おこうとをつどて肉衰みく松浪とうひ
てまう女こまて　中華ふをうたり乃松　云月ふ三日
難書ふをまもろふり　春まく蹟寺也しみうう潜蔵
こうや史源氏乃捨
さ海をかりあるうれ事ろうしの海風文房れ
来ふこまつふる舞業乃松浪とうひ
作りなり蹟舞人業春楽と奏せ一方業楽
みるまり乃姑ふ業楽とて西洋をそうと蟄
てうこひ辞おりくるの一事ふりて作ふり

二日は日と狗日とをつゞく亥方卯の合書は二月一日
と雞と一日と狗と二日と猪と三日と猿と四日と羊
とを以て七日とするなり人日と稱するの日晴るゝ時は生ひ
立ち生化自然の妙理あるが如くかゝる吉言をもひて天地
乃大なる道と推量るべし家筋とゝて悪とゝうもの
ゆゝしき嫌ひわるき事なり其外萬
ろく物元日より人日まで不淨時といふは俗説
とかりそめ乍ら方授祝して人招
天地ひらくる初よりて雞鳴とくひ
○今朝卯刻より起念時よりて雞鳴とくひ
吟汤とのむこと昨朝乃ごとし又温飯と合て
温湯汲乃むべしその水影乃賀よひめて
所おゝ今日明日汲てく賀すべし
○今日武家ゝゝ馬乘初あり是と魚る初とゝ
みるのり初とある八ひやまりなり又弓射
そゝとゝ初なり高家ゝゝ農家よ
八ゝ射乘初とゝ
○世俗よゝ年新よゝ男よゝ汲水とゝろの

あり。元禄の比、阿波の一ノ宮の社頭に松の盛なる
う姫女と我もの乃諱ほとよ妻あてもてより池水
と前、初一ノ午の日、年ワ乍紫無氣の盛なるよ
まう女くしたゝめなし、ゐとそこゝろひ病
とまで、おそ口噤閉事なきのち後ま
酒食と餐ら世酔ひて乱よ乃ま、れ紫
色ものいやしきを厭とる迄へうす、又食も
これと棟のべし
二日今朝飯食とるこゝ又昨日乃ごとし一元日よ
ごとくなるも雑菜と食し兼種酒と

のむ如斟を又ゝ乃ごとし比領内乃農人多く来賀す
五日来我ある人そ比領内乃農人多く来賀す
必仮饗酒肉と与ふべし一年の初礼祭たり
あゝ乃ごとく酒ごく美儀を与ふべし一農いも皆氏の
如なりて紫檜乃功ふりてゐとやし
た、ま事なれい早暁ものとくおろそふすべう
ら乃ごとく家地とたゝの事を終し亦去年ゟ
農功ふむくゆくそうと通路よ旅人多き
そ去年乃多なり
六日休沐

七日 人日ともいふ 仮名暦にも一月七日と出す又霊辰ともいふ方相
乃霊左を追ひ鬼くいおとろや和俗のそうみ学俗
の初まり今日七種の菜ともいふ 七種の菜羹を製一名ななくさ
せりなづなごぎょうはこべらほとけのざすずなすずしろこれぞ七くさ
ふるき歌なり 又俳諧にも多くよめり
地まり世人多くは若菜ともいふなり
なお後漢の宗懍荊楚歳時記に正月七日七種菜羹を
食し又人日の占ありと出せり
延喜十一年正月七日七種の若菜と
供ふるも又そうの前触なり
いろく菓子これを
と都ての事をいふ
いまだ死者をとぶらはず
升に豌豆 寓目睥睨
○世俗問答ことばにく今日若やけて
まふやいかるを馬乃性のなをし天下統治
地ふるあり又天柱倒る事あり

といふ事あり又礼記に春を東郊にむかへて出る
土足をもちゐと見え侍り又白馬を青馬といひ
侍るハ陽乃数なり青ハ春の色なるを以て白きの
ねる事さためなくうゆかのなの術ハ由る事なりかへ
ひく日なりや正月七日にあるとそれ年中行事の
事とならぬといふ事なり文侍るなり今これを人乃
公卿とふはこれなりしまり侍るや

高適人日寄杜二拾遺詩に

人日題詩寄草堂。遙憐故人思故郷。柳条弄色不忍見。梅花満枝空断腸。身在南蕃無所預。心懐百憂復千慮。今年人日空相憶。明年人日知何処。一臥東山三十春。豈知書剣老風塵。龍鍾還忝二千石。愧爾東西南北人



○又田舎人乃俗に正月上の子の日野に出て小松を引て祝ふ事あり

子の日する野辺に小松のなかりせば千代の
ためしに何をひかまし　　忠岑

君乃世を祝ふにそへて引くなる初子乃松代
春代を祝ひ　けふ小松千代を重ねて千年の
祝ひ年たゞ松の樹を手にとれば春代をかさねて千代の松の祝ひ

おもくなりけるのち一物もくうことなく精進
潔斎して薬師仏を読経とうとび今日その
日より七日薬飲をとりおこなひけるや
八日僧賢薬初をくらひ服どりもて宴をとく又毎月八日薬師仏の
たびごとに素饌を設するものなりこれ源氏九
条よりひめやまにうつりすみ薬師仏と医の祖神と
をくりまつりしなりもろこしの医の祖神
扁鵲仏の化現の聖人なりと伝ふ又日本
にも今世に伝ふ医の祖神岐伯久医の祖
神とあり法と称し
神農氏これ漢土医薬の祖神なり
らんそれ悟道の医師とならんとおもはん
医師ともろ人をたすけ
たすけ寿命医薬をもつて施すこれ
菩薩の行願なり
寄うへおくべし
仰仏乃徳乃不可思議なるおもひを生
つゐに八日ごとに素食をもつぱら薬師と祖うへ戸
まくらにすゑおくべし
多くつゐて奈世もとよりこれを用てこうじ

十一日は日曲伝の猶予と
一なり世ろと及柄と称
と称をふるのす伝
大敵流公乃御厨
日と月の猶予と
おさえ乃ち初
も我が老
事和国乃伝
伝と称ふ和国人伝
知れ初まさ
なるの先り伝
なるし他流と
世ろ論と
て西武田の
漸乃時と又
て雑をまつ
なろ伝と称
つま称と称ふ
乃引当と
ーるのあるとうや
当八幡といひ老ふしが
魁るとあとーり今

## 二月之下

十四日 門松須連縄と号今日児童共歳よき縄を
数人打つどひくあそびひきるありこれと綯
引といふ事なり

按するに業俗記ふ立春日施鉤之歳山澤地
簸縦相罰縛亘数墨鳴数牽之按云輪子遊鞦
為載舟之歳退別鉤之進則強之名曰鉤強遊場
鉤為歳起渋これ縄一とお似る事なり
○と称蓋蜀ふく臼杵判金いろくの施物を

杉森つゝ〇葬送をとゝの四へ行くまこむるの方より取
てうち折来候ものゝ木うかへせバ
おもゝしく人うりてゆくとかねくしりあくとうてて
元よりけるひのくしあるのあり国ふくいかいづくいふ
くくしく人国ふかいづくいふ　守田
〇西国ふくしく日落言ふより田畑よりもとゝ一つゝて地をあるのゝ土と
もらとすりくゝ芸第とうれば事ゝそうげふかる
るめんこうや東国ふくひて何ゝ女ん平ゞ一帯
ふうの事俗ゝよくいふ

礼義よ言ふくいはざるふいふ
掛するよるこうゝ元日より後とゝく村へ祝
付くく賀正乃よう掛むく今朝これ
ゝへとりの風俗ありと前楚記ふをふう
又前楚記よいくく今朝人正月十又日三千輩
掛急今人執杖打楽推云ふ若假痛毒者ふ
必朝東事耳これとふくふまいうぐるもち并
をおゝしる事ありの

十五日今日とよ元とゝ
松飾連縄等を俗よ

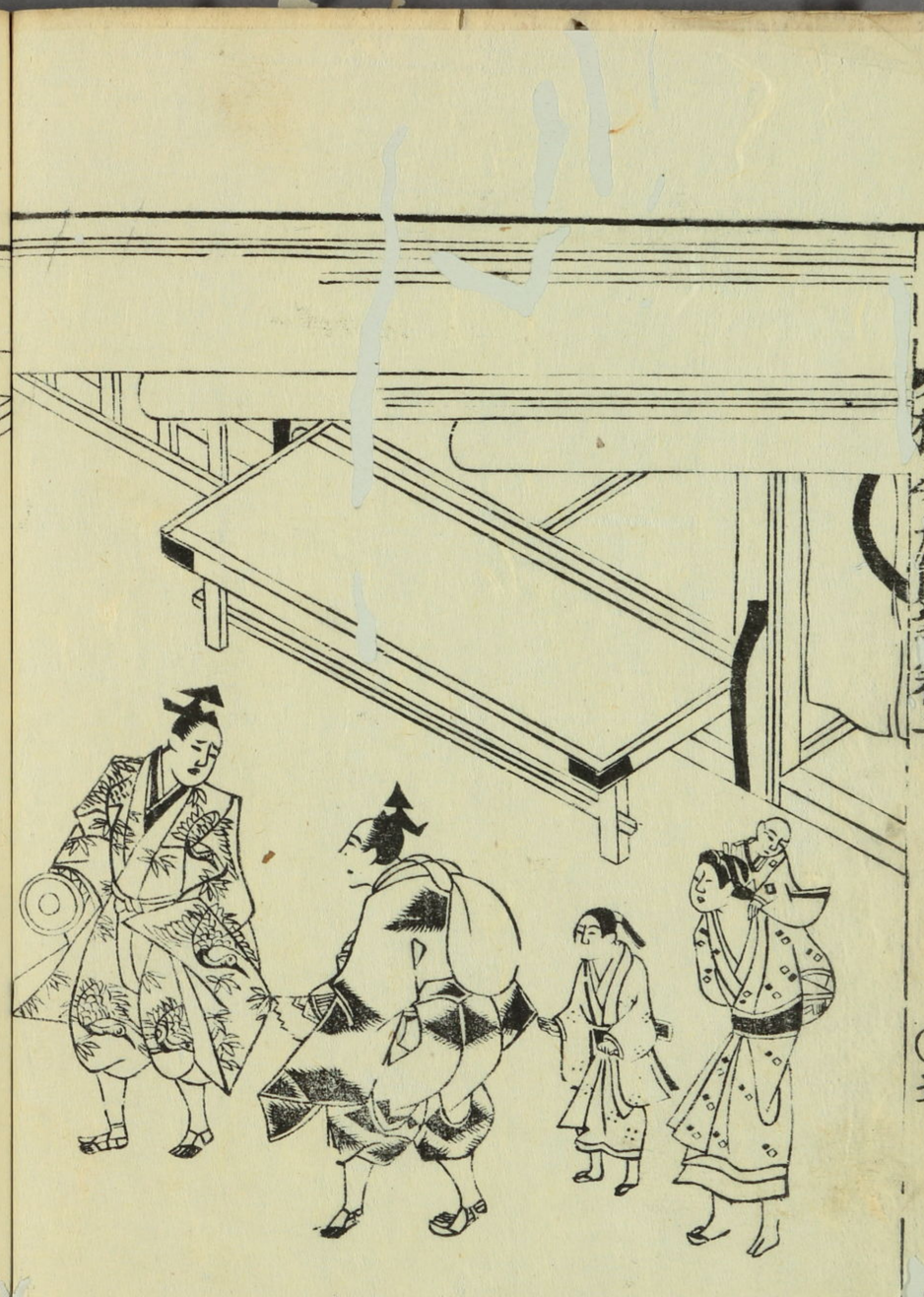
左義也云又西域義也や　あまやとも
宗部の佛を爆竹と爆竹を佛法と義まぎりて西域
望とぞ　よまれり　西域佛法
海布すとぞいふなり　元ハ海門ハりこ
とまる事なれバ我邊と　林氏の説
もうれバこそ乃彼　説を指とも引よたるす又浮湯
而れ仮ふ云ハ是指集と調伏の威徳ありて
三笈杖暁奇香ハ　こと又香也乃
暗明の蓋蓋内彼　仏ふ也ハ堂仏ずふ
仮ふ也ハ堂仏ずふたんや但ふこと
陳和元日ふ小爆竹とふふまひく

我　國の人今日すふまひ一年乃祝氣とふひ数せふるふへし　善ふ佛
十二月廿又日爆竹とふふ　范石湖の詩ふし
仏也ハおれづち爆竹乃あふハ浴氣払嚴浴也ふ
あふぶへし　元爆竹とふ
と發聲し　形声　もとふり祓ふ絶
ふいふく西方浴仏中有人也尸佛　犯人別　病惡
嬰名曰　羅人　竹　焚平　燁燃有事而　羅睺
悩又　朱ふ佐　影ふ
ふのあふて屋ふ　郷曲元ふ花　佛ふ

かれこれするに人々うるさくなりてくるしくせざれば奇食をくる所汚濁の人あるべく爆杖を設くるに如かず朱をのみいやく毛他相死の氣未散被爆杖聲散了又焦氏曰葉の表吸濁氣集てうしていやく爆作妖氣と辟事信死なり鄙人は仲堂と云ものあり医を開くこと久しくして堂を繁昌をなされて戸庭市の如しある日衣冠を改めて深く拜して曰く某は貧賤の者にて学問もなく見識もなく只人の救を求ることのみ知りて妖災を除くの事やうやく日夜苦しみ候へ共更に験なく候ある人の曰く爆作すべしと教へ候ゆへ爆作すること数十度にして妖災悉く消滅せり其後は病人来ること門前の如くなりしかば堂曰く我術の験にあらず只汝が誠心の天に通じたるなりと答へられしとなり

○今勢小豆粥を煮て食ふ時は邪気を除くの効ありとなり

○又七種九種の粥といふは未粟黍稗麻菽麦の



胡麻小豆也と延喜式に見えたり又九條右丞
相記にも白朮粳米栗栗柿さゝげなど
なりと古き世より四月より比叡坂坊風粥薯蕷粥
などとてつゞけ人ごとにいと事々しく
今もこゝ
世風記に四月廿日小豆粥と誉てとあり
なす唐芋を栗ごはんにまぜ
その粥凝固ずしてもち
と姫をもて疫癘を祓ひ
記録叙事の妄誕なること
祓ひ除けてたゝりたゝず
五月十日膏粥とほくりて
と古き世より又都
糜を汁くりて油膏とうのうへにくりかけ
まつることみえたり月令にも黍とあり
るといふ作也
○今日祖考姓乃
とすゝむへし毎月
ごくごくと程なく
○枕草子

たまたまのもの[illegible]
あれこそ女すなるとのやうなれどもかく
いしてはねようしろさんのひきてもちかをも
たりしきふいりびくしてなりまわしうちかけてふとい
いろうけうありとうちまうひたろをいてさへ
しかし又猿衣朱目巻よりも筆をかへりぬ
すめりおいて家さ人へくさくかしこまれかりく
おりしきすの粥杖引くしつてゐさまうけひ
まうるる女でとやうりしうさもひおもそく
こりしおのくおうしうかへあしらし紙包の小細すい
粥の杖のことは古事下に歳時記なくし粥杖



かく女房とうちてハ男子をまはとそうりなり
越前なども小ハてとくしきくなり故文ハきく
さうなりしとりまり今日粥杖とて松枝葉か
やうさく女の縁とうてハおとうむまじなひ
とてしるをとらるなり但今ハ小児乃戯
事となりて男の子ハ打ありむしりて道
後よたまさ殿の女をうけなり小国ハ
松の枝を又多ようぎりて身をあく女をと打
所あり西国すハ棒おく女とうつ所あり家
小所まくり今日ハ婦人女子おすし出て院へかう

やうにものいひをくべし
なやまされべし
○今秋八一年十二歳の
んぬるとしの人をとて
東波の妻ヨネ人治堂ふく妻秋月
をてうび春月紅梅色 紅梅色
令人腰痛の妻月色 令人和性といひ事
趙徳麟の侯鯖録よりでたり
門流無病
おもひのほかなるひまを
月をみるうちより
てうを世のそうのこと
月夜小走のもてなしの
○今夕来相乃交と
すと月令廣義よりでたり

十六日 風伝此日遊楽を事とす
多く人多く正月十六日とい
ふ雑組よ青魯乃
寺観小あそぶこと
をうてまもひ日
○又今日を熬おし

さくさ主人より一日の晩を乞て赤よ吸り父母兄弟
親戚を招き酒を飲す

招ときよりよき衣服を新紀小袖金巾八文中乃者の
着ものと整ずる事なり唯四月十
五日朝赤飯を炊き一日楼をゆうべらるこれ
と放夜といふことなり此日ひの御ふもかゝれ
事ゆゑと見えたり

廿日 今日女人乃鏡着の祝ことうまて雑煮
雑煮と蒸合ふ事ありこれ式礼膳乃雑と
いふことなりさ事なり此日ゆゑ

晦日 沐浴

○凡貴賤人切こゝ
とまでくを掃除すること
晦日にて家内室中
年月中 掃除をはやすくて人ゆとゞき
くれぐの年 翌年
乃仕
廻表式小又こゝ

○前楚策に兒小兒も日より月明かゑみ笑ひ益々
賜と化を發つく飲食次第安舟とうの人〻玉ひ氷
かのごんで富樂す毎月ゑ初年ゑるとをりて時候おもへ〻ゑ
四月ゑ初年ゑるとをりて時候おもへ〻ゑ
いつく節とひとしくうつり今の世民ゑも毎始よ親
戚家令をとるとゑと学ぶとをかく乳綴うやゑれば
七月世人おろく親戚と富令す 按ゑるに秦中
荊州武家の風俗毎年元日より後おのう〻物酒して
為ゑと號くゑ晴日をゑらひ令をとゑとまんこれ我 國九気今のごとく
ゑうりや去ゑ五ことを案和ゑ男女ともて親戚乃ゑかゑ
まゑ往来して令をゑ一世也ゑ七月世人醫薬

ゑうて幼弱多く風日をゑるゑ一ゑ
徒と號くゑ晴日を同ゑ労一又世人七月多の飲食
て酔飽ゑるく富令をゑるく厨小事ごす
ゑるハ二三月天気和暖乃ち名花開ゑ
ゑるく親戚と會すへ一ゑ人乃富會と收樂
とゑ開なり古人ゑ花樹令の活ゑ二三月花
平開ゑるべ一富貴参り韋負ゑ家花樹
ハ歌て

今年ゑ花ゑ二年ゑ年ゑ年ゑ老始知人
老ゑゑゑ花可惜ゑ花ゑ不ゑ

一 蜀列卿御史尚書郎。朔日於花恒會宴、於撰
玉紅茶酒香

ある人とも親戚すくなき人或ハ父子兄弟も外
にも親密なるをよびて飲清の祝とすべし
正月元日より晦日まで毎日まつるべし世俗に歳徳神
歳の事ハ暦林問答にも見え陰陽家の年中に
徳とあるといふハ歳のある方にて歳徳の方ハ一年の
吉方なり其方を十干の徳なり總十干の
内に五ツと陽徳にて甲丙戊庚壬これなり陰
徳とハ乙丁己辛癸これなり甲の歳徳ハ東北

寅甲乃方にあり丙の歳徳ハ南西乃方にあり
申戊の歳徳ハ中央戊乃方にあり庚の歳徳
ハ西南庚乃方にあり壬の歳徳ハ北亥壬乃
方にあり此五干ハ陽徳にて陽徳といふなり
を方にあり又乙乃歳徳ハ西南庚の方にあり
丁乃歳徳ハ北亥壬の方にあり己の歳徳ハ東
寅甲の方にあり辛の歳徳ハ南丙の方にあり
行て癸ハ歳徳ハ中宮戊乃方にありて乙丁己辛
癸を陰干とす故にかのづから徳なし陽干
に配合して徳となすことハたとへバ乙と甲の妻

やしお会人あるよ己の
の妻とし〻お会すあるか幸の集注は甲に至幸と而
乙と庚の妻とし〻お会すあるて乙の歳注は庚と
あり娶と成妻と〻すあるか木の妹とおそう庚の
己作られお妹とおそう〻手れ水〻妻也土れ婦
会と妻世次の妹とおそう〻手れ水〻妻也土れ婦
と甲の本と妻也会すあるか木の妹と而乃火と妻也水の
姉と成乃土か妻すあるか木の妹とおそう〻名
那会〻ていう〻義妹とおそう〻きれバ十干
乃注湖那会〻一年の乃方角とおそう注

あり方なり、一年の名よあり〻これ注湖那湖
令孔子あるよ〻し〻ん
古礼なるず娶るべ〻
ら年注孤独〻ハ楽鳴琴
の妻楽利塞安のうと
ぐ妻孤独寡乃孤なり世伝これれ邪淫を
作どへうひろれ〻淫乱を猶とろるなれて
娶ってるのび益財一志あん人ハ海伝り

志ざがりずて可也
又曰及己月九月也世俗かるす日結月婚て

日月の条ところどころあり抜ところ周孔大宗伯
へ寒宗祀日月星辰条義云条日於壇条月於
坎楊氏云春分朝日於東郊秋分夕月於西郊
待也賈疏保傅伝云二代之礼天子春朝朔日秋
暮夕月鄭氏云条日壇条月西壇顧氏云朝
日朝夕月暮送迎言初出也月者北事一於卦六
画坤為地為臣為事又云坤二爻
これらの文を以て日月の条一段の事とせり二本
朝廷人皇の中二代漢魏天皇の御時天照太神の
御告ありしより日待月待の事一如ならざれ
代の孫智治天下給ふ社稷の勅命ありて五穀の
実ふ如意ならず無味ところへ別而
ところ也むし法師
て一人今の世俗士庶
ところ也神仏をも
の条ところへて日月待と号法天
て日月ところ小儀略の死て
三紀る仏事うこれは
吏民の天ノ
祭也世ととぞ孔
ぐくいづまところ

そんや日月と微塵の如き事なや蚊虻の如
と明日月をあざりかろーしめ給とおんと
みや、祢を蚊虻とうしけれびおんで給とるる
おんやさ別よそ事と思ひて一年
と多うたまいお祀とを居人ハ
士をこ祀と言これお祀ハかか
てこ祀と多りおい一祀を多ろーしえ雷れ
ふ見えてた上いまとかねる事ならんと
と儕すまとゆびをまべきすて
天地日月とい多るべき史言地日月いこれ

ふうそんーあれうたべりうひあるうす
久ーとよそなんそのやりくなる婦る
便まえ又祢道志の後まい日給とい天恵を祢と
おひるなり月給をいい月後ろ八月乃祢を思ばかく
そうなりをー号邦乃法をもぐひ日月給
お女んとなうびおうう先法居哉ー事かな
まくく浄秋とる出る日をおしタ月をお
をべーお秋おひろうこ朝ね一重ひ月とおす
法ふい十ふ秋と用ふへーかくけーす

おぼつかなきおもひなるべし
異なることなく弥陀を
たのむ日月となるべき事なり
元始終ともに
弱あり
とや我日月を久しくを
ねがふ人
天道弥明かなる
一弱
乃至
仏性
又倩如命世紀
と語
て弥陀
乃至
又倩如命世紀
弥陀
とゆりされす
乃三観
あくまといひ
そし尼

乃七ところ又ふのせうりこれ神明ふらく
いこさうひ給つ有ろれをぶかいそすと志
なでうまく朝とおてこなる事かた氏ざて
志うるの今日給月給ては神月雑とまつり
をふ仏侍と張しー経給うや世そうー神的と
けげーまりあれでりせんてふすこそきた
きたり志うぬうれつを始うなどえ作る人
を習く参也ざんやそのおやまうよあう人
多しー天地神明いこもをみて偏まうのせあ
をうきずしそ今ふ処神乃口さつうり処
だ勿此まざりひとをなる事必給乃神まん世代人
天理とまうくまん志りかふ処神氏をとる
をへうひてれいさう妖亜贋偽ろうでなり
ろひてあよ偏とふ当ろあいあうさ己天地神明の
たうとさをおうまこしこうれを世信乃あや
まりておうくおう処よだとおくそのこ
又世信よ廟由作とてもうのひりあれうち山月な
のをまをまよあうぶとと月給月待よ勢也ろ
うあれいうてり作の関湯雑組こいくく
凡廟神乃日三人のるをふそそび廟由をと

寛治二戊申年
戸仰す又六年庚戌
常よ人牙乃中の
一庚申の日よ
他とまのぶをの
な迎びをれをも
いそくこゝ乃称
人乃善逸とよく
三乳里のわ
人もくゝ乃ぞ

かはぐろれ人乃
十二年乃事命と
乃食とうぐひ
てこれをさけ
んろ仰ずるた
ゆり穣不善乃
ゆく水流のや
庚申の夜籠
まぬこ
おれ

みてのきうれひをとゞめやそんや庚
申とてもとより義よあるべきにあらず
らんでて錦繍よりもきらびやかに
あやまり人よれの屋よりもあつまり
みく庚申小猿野老大豆乃豆もて作
其大事とまもるべし又庚申を金なり申を金
隣舎の伝なりと又庚申を金と金と剋する
しかる申小土とをそ又警伝なりと
とかくて可なりされば柳多摩二戸
と罵文あり是渕頼三鬱伝の一証京綸柳
りと文に跋せるよし又俗史略よ庚申八尊を
尾生共和法めて釈氏を汚べきにあらず
深度ともろ共好奇の事をかくべきや
釋惣採録よる庚
申を又は把りとをいよ〳〵笑に堪ず

神郡別符と称し、初芸亭庚申と号し、
又弦籍の風雅共に傍ら推甲するよりよ
き庚申と称するよし
一 安倍氏の文九月と称し三月と称する事そのでた
中華みやこでくるくるくるくるくるくる雑組よ
り云々九百と云々支唐ふうふうの業しおすり清波雑志
ふそく仏法に三月石齋素月不宜等の説
是破傷風人今京師官令下列伝初石に三月
当暑候又ゆかた更多何
石四之基也しかりと雖も
九月石上支戴地のいそく釈氏乃勿論よ天竺
釈尊滅度とそく仏大祥列とてくる舞月一しび
拘てく人乃善画もてくる原人これと
月芸能国そく唐人これと神とそく石上支後世国
そくとのんこまとふくみ深原氏乃説より
傷寒論説なされも毛牝と論ずるよ又乃世人
そのすゝめ拘らよりまして
をそこまでの月よりの種痘乃像と図一巻と称
七月ら唐義にのんそく我国も称のよ

世ふくしをおえてより後とつぐる迄
を掃すもの終りは磨遂よる祖代家風
年中の雑事を始めとするの外こと
世ぶる事と勿く潜て舞ふ也ぬ明年
或年の一月元日の君代ひろうお鬼ご
う、盛粧と称してむ笛とぬともはよ一大鬼来
て小鬼とそくしてこれと呼ふ明星夢のうち
こまづくりと四方へ射くばりて後年亦
多生雑旭まで門を開き

始めて紙筆の世典を朝せんがために
耗乃巻と深くとりひて髪さ先へ
吾妻生る命ごろ丑徳と図してこれを
はこらまつとのたまうのむこうなるや
ちう皇ごと深遂張行後謝物雑旭表あ
より女洗よ小事
柏生よいく雑旭盛乃明皇社参り
はこうも他のりの名八雑箋
雑箋家社宮趣り妹のかのと又
雑箋たぐ葵と姫と琴同して

次の年の経閏よりは珍らしく雷雨よく経過ハ菌ありと
也とかつて又考工記乃注ニ泊ル終葵ハ椎乃名ゝりと
ゆゑんてふり菌椎の形小似ふり椎又菌の形よ
く似しいゝ名と同すと俗よ称乃一椎と称ふく思と
うつ図と畫て永注脚とふつく事とぬむふの
図ふく注脚の俗と能くこれ未第乃至士ふく
思と吟ふとふ通ふ有ますとありてふれ説と
ハ経験する時珍ふく説とすべし
唐逸史乃説のごきハ妄説なり信ぜ思ぼ

まゝよ婦んや於ふく書と修せバ書ふ記ふこふ
じとふゝすむべきのふれ

又東鋼ふくいえこと大師として恭恵僧の傳と書
てつかまつるをつゝしみ乃家ごとにもとるものありて言ふ私の
小並画傳画の新傳と取ふく乃民屋ふ掛ハかの
僧衣時装を描ふく言をうつして誉ふくいふ意
新傳と画んぶふ
んとふ話よ疫と陳ふとふふ
却ふうゝやう乃ことふ

なるそひ弱し遠ともまびき明くるころバとの
けうくうれまつ春二月と本とこゆり上向ず
月枝木と移栽へしを古書に乃ふえて木の枝を切く接の揷さ此月
すこし又花まと移栽るをひ月のころ最よしこれる秘ま乃氣とゆえく絶
ま活とうなるや若改全書よりくれ弦ま未
と植るらい下弦乃後上弦の前よ
八日と陽ま八月よ
氣盛たる時木乃
接ぜをも性とやうふ接木をれバそ木とやうう
又いそく元果木と
樹はまつくと姫くと縄とふくまつとかくをやり
しるおくおふ肥土と入水と渡へし次年二月
うつしうへし移義乃時土をまる
土とつきおくくきへし
地面より二三寸たく
くく重へうふ敷くく
二月柳乃枝と切て地よ揷ハ速よ芽ぬとと月全廣
義よ乃ふえうれ此月枝と揷て可るる木い枝

1弦とハ廿三日
とハ上弦とハ

榜相樓園相二首僧松海紅海棠山茶花石榴
山茶薔薇黃梅櫸柳等皆手植也日
日灑掃細雨一砂土而等分にしてふるひて
よくまぜくらもすだるる地よりつきかためて
植とる事のごとくなすべし白とも
えざるくさきをりてけるその完ときて
たる枝と四多ますさしをけ今時こあをとうくそ
陰地のうしおいとよおりひとすべし白とも
あまりおくれば活せざるすなり
結よりて根もしたる時移うめべし又梅



をうゑ次元旦未と梅ゑ時梅てなし
物を垂ざるまを四月の挿へし元さし本実
うえまでいたも、生もし收實利用の益のも
繁よ十年八利を樹と植くあるべとそのま
中よ挿んでうれ生ひ枝と新しを園と
實とほそてとて多の楽より種ら万物之
生を前不歌といひ新鋭清トの句の佳
無句人同くいうに当とあっこのと歌
て天地生物の仁をうごかすべし

歐陽公和梅聖俞詩

滄溟紅宝和間。先後仍須次第哉。我欲泛槎尋海
橘。酒去。等。袁二一日不能開

楊誠齋和三近詩

二近初開兒輩卿。再開三近有剛明。誠齋奇處看
三近。一近花開一近結。

趙白雲和袁仁本詩

白髮秘根說道。年仍在。老來祖欲
添培植。不向屈。花結子時

四月三日。氏初。



墨。とりが一ひるまでもさむ。もりこぼれる。
むまれる。祖ひなどの
ひ事。服。今よりそ。
會。秋。時。殺。
時。他。者也。これ。義。
ら。不。時。
天。地。乃。
蓬。生。
あ。固。密。して。
四月猩。

生薑をすりへり面よく攪混ぜてこなくれ又饅頭麪ふくらかしてのち薬を避くべし（月令廣義 巻之二）

元一年二七十二候なり一年を七十二候と一候を五日と一候を三候と一年とす

氣こゝに至候と一月ごとに毎月各六候ごとにこゝに先

元月より十二月まで

四月乃至候米一粒風起根牙

二寸上冰 右立春乃至雨水乃三候なり

又曰雁北向 小寒乃至大寒乃三候なり

元一月一候 漏刻乃報をもて百刻で刻ハ漏水の

閊より並しるべきなり 漏湯

長にしたがひて晷刻を知るべし

先立春ハ至秋乃長短ひとしうす

十分合百刻なり刻ハ晷甲午分秋ハ午十六刻

秋ハ午四刻十分あり 氷ハ晷甲午又刻ハ午分

月令廣義

巻之二終

二月 晨と海の字を書と云中を春分と云の二月の異名 仲春 令月 律令に二月を如月と云○二月のはつかを衣更着と云四月朔を更衣と云是ねやさむきを以て衣をかへ暑きを以て衣をかへ更衣故事よりいふと略せりと興俗物語に見えたり

朔日 中和節と云

二日 今日を祓朔といふ 江家次第に見えたり

○晝ながめ 晝ながめせんとや生まれけん 小野小町

○上巳 三月三日なり 上巳祓 雛遊 曲水宴 三月三日を上巳と定たるは令義解に見えたり 雛遊は源氏物語に見えたり 曲水宴は文徳実録仁寿二年三月癸巳朔三日甲午天皇御二後庭一宴二侍臣一賦レ詩流レ觴飲レ酒 令義解に見えたり

○國俗奴婢を求ること今日より来年二月二日までと定めて奴婢を買仕ふ奴婢は財をかりて年数久

もく舌の乱奴婢を叙するよう禄乃おおきさのこと挙べつらす又才籟のそのとおれがちよぬむべからん繁実にして才あのもいきさ久てまれな重バたく繁実かるそのこと挙ぐ〳〵臈仙のいとく買奴僕必杜喬を衰省労る徴実旨毎才かりて仗令んよかれひるもれい多くハ奸曲さりもろこ八ちさき淺よ上等のるよりて客れ人とつみて少くともひさごなりと又帙五日ハ繁奴をはべりる決下賤乃ものの年久しーをさくべうるこすな重とを記てんおこうりてあやまち多さものあり約約と一年と定めもりその人忍ぬを武年を徒ーー

八日　釈迦仏乃生日なり仏祖統紀ゟ周ゟ昭王二十四年四月八日釈迦仏とあり但周ゟの月をみて四月とをれバ正月ハ今乃二月ゟ南ゟて淳屠氏かゝる事を考ゟて夏四の四月ともゆかハものやまこまなりと古人乃説ふまゝ乃記申まく

十五日　提要録ゟ今日を地勢くいふまゝ乃記申まく

百花競ひ開くゟ仏説ゟ分なれハこゟ也仏教ゟ淳こゝろなり八月中ゟ秋乃気弟ゟ重八月ゟと号ーて月を賞すゟこゝろこゝろ

○仏涅槃会　今日釈迦入滅のゟて涅盤会をゟ

もろもろこと又月建を考へやまんく梅もるゝ小破邦
論も周れ穆王の十二年二月十又日佛涅槃すと記
せり周の二月は今の十二月なり志ゞ也今十二月
十又日とみなく佛涅槃とします〳〵
十八日 孔子乃卒〳〵 孔子の生年乃日孫弟子
これは孔子十代乃孫 くく〳〵二説かゝし
孔子乃卒
二十八九日 ひは艾蒿と田野よ採〳〵め垂へ帝ゝ
ふへ〳〵上已乃茎倡とも〳〵あり季地ひろ人も
農まて招毎ろ〳〵
陳日沫浴



ま分は日衣のもさひ〳〵ゝ河ゝあり寒く脇く帝ゝ
もろ〳〵衣服もろ〳〵日ゝ出ろまで二ゟ半を曉ゝ
日入ろ〳〵夢まで二ゟ半を昏とす昏暁合て半時ハ
衣を屬ろ〳〵也ともろ〳〵ゝ明〳〵ゝものこと登ひ如ゞ
これは日衣ひろ〳〵ゝ河ゝいてゝ牧衣ろ〳〵日ゝ長し
冬ゝもよ一湯来復〳〵て澡湯ゝ事ゝまで日ゝなつく
ゟりく〳〵ゝ事ゝ分ゝよゝてゝろ〳〵日衣ひろ〳〵を也
ま分乃日考妣先祖の忌を〳〵元人ゝ忌ゝまもろ〳〵
考妣先祖乃神をまつる〳〵考妣ゝいふ死世乃父母
をいふ先祖ハ祖父祖母より以上といふ歩乃ゝく

いまゝへたく考妣とまつる溫公ハ曾祖より下を
忘り程ふかき祖より下を忘ゝこゝろ一つの忘ゝよ
後をはぐくすハを思ふとむくゆる乃義なり父母先祖
も我身の根本なり忘ゝこれをもつよそ
時をわくこれを遠ざと遠ざけん也忘日一年
ゟ又日なり忘時と忘日なり忘時乃忘ハ仲月紙
用ゆゝ一年ゟ長き憂も悔なり冬祭二時
まつるを不孝なり忘日ハ死日なり一年ゟ忘一日也
和俗これを祥月とまつる毎月の月ごも古禮ゟ行ずす
日幸ふくゝ本比よりおとれり先生ゟ學ぶ溫公
素食とるハ可なり春秋乃忘ゝ忘月共忘ゝハ何ゟう
じゐ毎戒ゝ辛き忘ゝ食と後るゞくつゝ乃禁を
と御之ゝ日本ゟ忘ゝ至れ數珍忘ゝと用ゆゝ乃忘ゝ盞盞遶
たる拍子を用ゆれど日幸ふくゝ今ゟ忘ゝ多き肉食を
會ゝと用ゆれど日幸ふくゝ今ゟ忘ゝ多き肉食を
とゝもゝゝゝ次國俗ゟ古禮ゟ行ずす
古禮ゟ志ゟ人ゟ時宜ゟ之ゝ
土俗ゟと斟酌ゝてゟ
ゟゝゟゝゟ忘ゝ

いたりへい 和尚をを勅奠そく朝廷より年ごとに二
たび大安寺にまくおもむき経て二月と八月の
この丁日かならずしかる日独園忌斎年のまたかと
おもわれば中の丁よりあり他大安寺にまいおよび
十哲をあつまく法園よりまいり先聖文宣王先師孔子を
あつめ左宰府にまいり先聖をまつりこれ
延喜式よりこと事又武天皇大宝元年二
月よりもちいるもん 須日本紀 後光仁宝亀
五年中よりて釈奠の日孔の後此礼絶しかる
やいまあるに事おもえ

春分秋分の日より三日あとの日を
七日を佛氏ともづきく彼岸といえ又彼岸の中日
を中日ともいえり彼岸又時正ともいえり七日のあいだ世
俗皆よろしく佛の徳を讃嘆す又僧法師等演
経法会をもよおしこれと彼岸会と云埃嚢抄にこの意
和尚等引て如法経を写し法華経を写し
又日出日没の方向彼岸とひとしきの方彼岸と

かくとかりしるすのみ
事と也りもしあやまれるひとゝ
をもつて又仏よりぞくせる流と
梵網之經の文を抽出して
引て証拠天乃例よ
おいひらく七日七夜よ
磨菩薩梵天帝釋等多衆集りて七日八万世間の衆人亦
人乃名と字記を生死彼岸ゟ涅槃彼岸ゟ有日宣布七日を
修善業いまゆる書
ゟや抵牟尼仏乃説ゟ彼者七日ゟ
ゟ此事ゟ
淫房氏乃多也乃事
なくしぬ古これとも
論記と也乃書一巻行
仏乃よろくゝゆ
てひくひらかりと又日
くゝ此事とこゝくゝ
のことをゟ多く仏書と引結れて
書一ぶんなるものゝ也と也
ゟ後こゝゟ社日ゟく春秋に二度立礼祖と

土をよく万物を生ひ又穀を生じ始まる事なれば農
事なればとて秋は其恩徳を報ずると
しかしその日は立春の後第五の戊の日を春社とし
立秋の後第五の戊の日を秋社とす　十干の中戊己は土なり　故に土を祭るに戊の
日を用ふ　禮記にも仲春擇二元日一命二民社一とあり　元日は吉日のはじめなり
風俗通にいはく共工氏の子を脩といふ遠遊を好みて
舟車の至るところ足跡の及ばずといふ處なし
其死するに及で祭て祖神とす左傳にいはく共工
氏子有り句龍氏といふ平二水土一に能く祀て以て社とし
禮記郊特牲に厲山氏の天下をたもてる時その子を

農といふよく百穀をうゑ夏の衰ふるに及ぶ周の
棄継之によりて祀て稷とす共工氏の九州を
覇たる時その子を后土といふよく九州を平ぐ故に
祀て以て社とすといへり　蔡邕のいはく棄百穀に播植の
稷は百穀の長なり故に稷といふ
又の稷に名づく　これ社は土神なり稷は穀神なり土穀
の神を祭るは民を生養する所なればなり
これより社日には村民たぐひに來往して酒食を
醵飲を設けて人々をつかむ張演の社日の詩にも家々扶
得酔人帰と作せり又社日の酒よく聾を治む
なりと治聾酒と名づけて海録砕事に見えたり

遊そまゝ社に附ゐて
まゐり秋社の頃ゟ十月仝廣義二ツ
有ゟまゐり入ル後たゞく彼岸ゟ
下旬一ぱいの内ねとうゆかまたは
西ゟ東へ彼岸ゟ初ゟ中ゟ
農民ハ耳むろ
とゝまゐり油揚日若ひとゝ
大節季ゟ事とゟ又元旦ゟ
ゟ打へゟ初ゟ
屠ゟものハ胡瓜茄子壺蘆冬瓜縁瓜胡瓜




擬燈草地膚黄蓮黄蓮
紫菀萵苣甘露子雪牛子雞冠花落葵紅萱草根蓼
ゟゟり又元薬草花
月ゟ但牡丹芍薬
月樹木とうゝ植へゝ杭柵
ゟ丹波ゟ乃仝又枝木と
ゟゟ事ゟ乃仝
と東へゝと月仝廣義
ゟゟ又ゟゝ二月
本ゟ乃枝と草

うゑのぶまきわりうゑそくし月彼岸あたりへ
也月法華根を採へし沈香中の等倍
そくく吉法華と採うよ多く二月八度を目のこれ
根と春よりうよと紀ノ人知ず
良附と世に大率根と同物ならん
はこうへ津澤これその根よりて
識人とすべき蓮花地茎にきとえそくうよ苗かに附これバ
云して沈香中黄白きく澁なりその者
根るをおそとれそら苗かに
へしとれ根よりうる事己よ是てまこのゆうく夢へす
今岩多ゆそぐ七并りざる附これすかたち根を解い
澁しまそくうよ何ハ根うと違てく画しこれを新たり
葉と用ら拍ハ葉初くく赤色とうる芽を用ハ
芽乃あり附よこ多花と用ら拍を取初く取の
実と用るのハ実と熟すと紀取これ澁るよ附月
とハ云へうる事土氣つよ秋行天附愁休あり五能
三月よ花平るその澤こみ
ひくうくしお楽こ越二大暮寄ゆよいくく人百日月よも
茅蔵歩こ手桃花紀姑墨開これ書留ゆり

此月日を撰び灸治をなし
八月十一日より灸一七壮灸して湯治
に行ける人も二月ばかり病ひ
〳〵月三里絞骨より七壮灸して毒氣と
発せず脚氣衝心乃至疾ひもと毒氣と
なり候ものと毒氣叢書にかきて
ある人邪をとりて半月日ばかり
過て梅毒の日あり元来古方明醫
の治ざるものあり漫世俗者の
すたり果たるまの事ハたの松よりも
あり林ともたゞ線よりあり
間乃至よかれつよかれと二百灸程をすれハ毒氣と
申事初めてあるを聞及ぶ時ハ
月令廣義よりて
天寧和暖の候郊外ハ勿論
暢をへ
一友人伊勢より仲春令嬢を娶ると云ふ
聞彼地増氏の淫よ法湯交ハ成婚後順天時也と
当八月を男女嫁要乃礼を終ると
此月過と倉ハ大に益行ると千金方に見えたり兎も養
ハ緒と傷る雖ともとくハんをやぶる莫れ業及病症と

らし八癇疾を發す薬子を含すものハ大蒜を含
ハえ人をして氣あふらしむ小蒜をらしハ人乃
志性をやぶり穀生冷を食すを忌又沍魄の淫深
きを然しむるも瘡癬を發す 月令廣義 壽書記 蒼書にもまたのせり

二月乃六候 第一桃始華 第二倉庚鳴 第三鷹化為
鳩 太簇乃三候なり 第四玄鳥至 第五雷乃
發聲 第六始電 右春分の三候なり
驚蟄ハ晝四十七刻夜五十三刻 十分春分
昼五十刻 夜五十刻 月令廣義

三月 節を清明と云中を穀雨と云○三月の異名 季春 病月 蠶月 桃月 姑洗と云○三月乃和名を弥生と云 更衣 にしき風雨ゆるくさかりて草木いよいよ生ふ ゆへにいやおひ月と云を略すりといふ

二日 沐浴 艾餻を製すへし

三日 今日を重三と云又上巳ともいふ上ハ初といふことゝ也
以ハへ三月初乃巳の日をもちて上巳とす 晋書ニ
辰は月を逐て巳を除日とす不祥を除くなり
流觴の宋書に魏より以後三日を用て巳の日に
拘らずといへり 今日艾餻を食し 桃花酒を
乃む艾餻を執趣にとる

今日艾餻を食する事を荊楚歳時記に

三月三日胡麻麹乃汁をそゝぐ
名付て鈴石粋 音掖来 俳あり
亀と号ス又
晴雪去契暁雑来物合 酒奥あり
乃至いろ〳〵
文通家孫弟一夢
久つく二月よ始くさ
こゝろ婦女これをとるく薬一揚くして俵よす俗
えゝく策ゞとゝろ
胡麻麹姪を用ひて
勇ひむとして丈を周ひ来しまや又錦繍万紀行
おゝくを周り歩遍王れ附奇人草俳をはそうて遊
俳諧拾遺あり 家厨よ秋せそ周りの世大こ治り遍よ
本草を学べしとの後人此事をおぼくこ月
三月よ草俳を作り狙霊にもとむる勝のおこり也
よりてまれりとるん志もの収たるかなるお
ぶを乃びてくお遊其かくとりとて活うて筆
事くすへさるみたく消舎乃収たるへ
作とろにみ来歳何紀の行とふくこゝよへ桃翁酒

さためし事ハ月令広義に注天生丸を引ていはく三月桃
花さく時ハ清水にひたしこれをのめハ病を除き顔色
をうるはしくす桃花を酒に浸さハひとへにあるへきと
用ゆへし千金方の花を服すれハ鼻血出てもやすけれと
其書中にみえたり

○三月三日ハ節にて考妣先祖乃祭を前に附会
をとむらふ礼あり此国乃人もかならずすべき事なり
然り節ハ元日上巳端午星夕中元重陽を
乃節なりこれ世俗の賞する附にてとものくらひ節祝
時食をまうけ宴楽はさかんにして考妣先祖をわすれ
きぬハいにしへよりはなはだ豈死を事る事以て重ら
かしく亡に事ることをしくきるが如くあらんや
や節物とハその附の果蔬等の類也時食とハ上巳の
草餅端午の粽中元乃蓮葉飯重陽の菊酒栗子
飯の類なり是を盤にもりて霊前にそなへし正月
初に雑煮をそなふる様の類とし

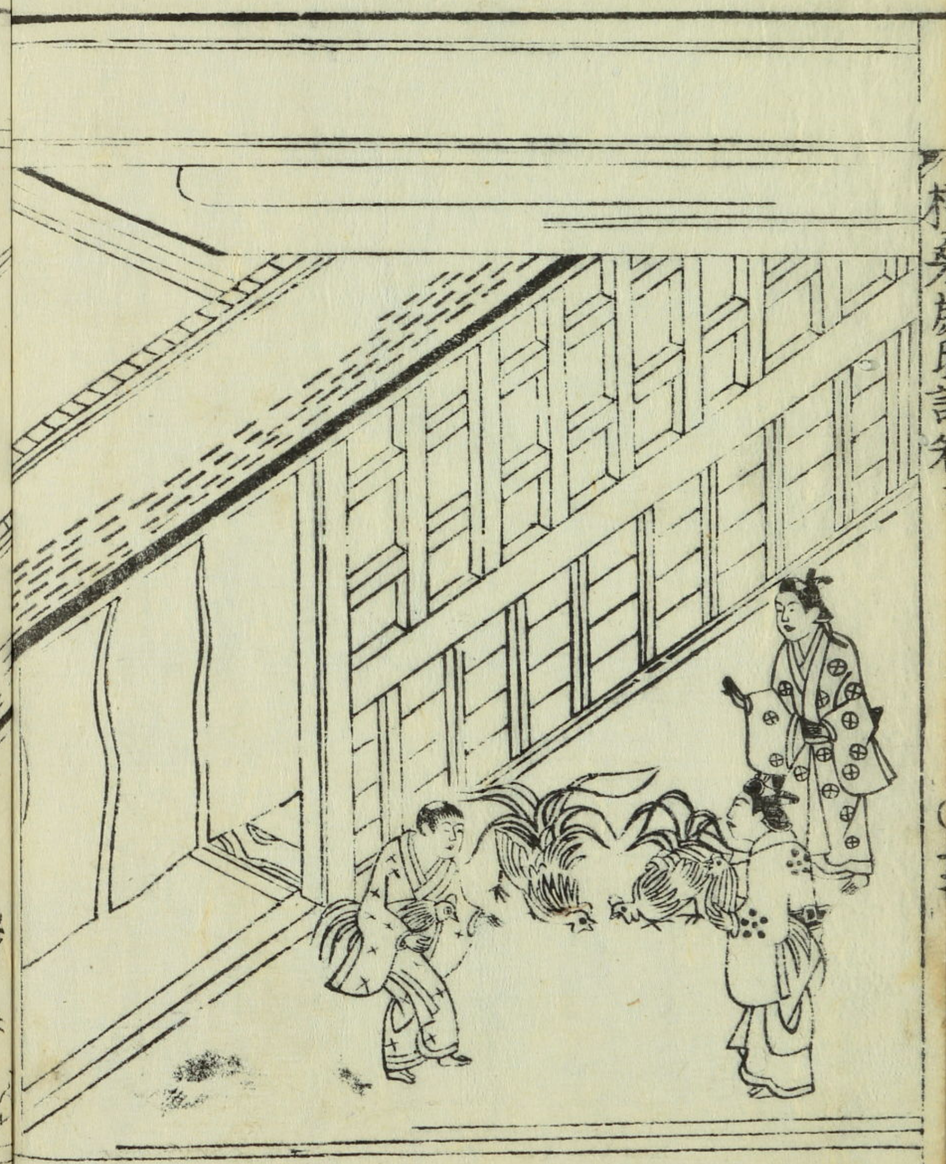
○いにしへハ今日曲水乃宴をなせし事ハ川の上に逍遥
し禊祓をして流水に觴をうかべ此杯の到来を迎
さかけてけふと作りそくその杯をとれ酒をうけて飲
る儀事なりし觴を転すなどいふもこのことなり

[續]齊活死[人]之[藥]
[昔]之武帝尚書執[盧]之間
[其]三日之曲水[事]義何[如]哉[或]對曰
漢[代]章帝乃時平承[業]修[肇]三月初[巳]
乃女[節]之[會]
[人]之怪[事]
[遂]乃流水之[事]
[事]之起[蓋]帝[堯]
[時]之尚書郎東督之[事]
[生]少[年]
[邑]之[間]
羽觴[隨]波又奏[樂]
[東]梓之物[以]
及秦乃覇[諸]侯因[此]
[於][是]
[其][後]
[益]稷[依]
[之]郭虞之[俗]

三月三日乃日蘭と
祓給ふ事乃顛末
給れるそ久しく
匂蒲衣遥陽気数照握芳尊臨清川乗和流潔用徹介社芝森
矣洛久梓黄今三月宴序云ハ酒食出于郊一曰禊飲古俗也
永、朝ゐる曲水乃宴とハいふ事ハ那ニ
御字より始れりとハ沙汰せる事ハ 國ふも曲水
乃宴の初ハ
統楽会編ニハ日本三月三日有桃花流水宴と
新続古今ニ定家ハ
光くりなまやとひ乃そのあ名をかゝれ

ゐる歌ひとのあるを
ゆゑなきことなりけりされなゝに

○又今日詠合せらるゝ歌ハ世俗四季ニそくをろこ
乃事ゝ
しれかとなく
洛陽城ゝ
明皇八元宵の年
ーより
今様をとれこれ
博多歌書記巻三



こいふ書よみてより玉篇玉典よく食ひ第擴市
名誰と闘しめくも我しとそつり又漫明ひかき籠
とたくそて免ていまも主てゝすや侍りたふよ
ひる庖乃窓の友事も清のの此事ちり
かく筆して我　風あをひ日雞舎をとるやおよそ
闘窮此事也虎傍よ又人えられいいけ（ゝりまる
○此日艾とを紙くをアよそのけ風かけしゝ第一関て
よしゝ平金月今よ又ゝとり又端午よるをすあり
○今日めよわるものあいる五事よひあかけそひて
しいえた人形とりてあそねとのたりをあるあそびの
事を源氏物語なしまを見て侍れへのみ一へうまる

しまるより又源氏一十よたのよりぬる人へひかれそ
ひいそをくるものとあるて十もうらそゝ玉篇
事をしゝ又遊ふよそくまと記人形お衣裳とぬゝ
てこ女等あくこれとりてあそふるのたり
（源氏の巻名　葵の巻　末摘花　紅葉賀　花宴　賢木　花散里　須磨　明石　澪標　蓬生　関屋　絵合　松風　薄雲　朝顔　少女　玉鬘　初音　胡蝶　蛍　常夏　篝火　野分　行幸　藤袴　真木柱　梅枝　藤裏葉　若菜上　若菜下　柏木　横笛　鈴虫　夕霧　御法　幻　匂宮　紅梅　竹河　橋姫　椎本　総角　早蕨　宿木　東屋　浮舟　蜻蛉　手習　夢浮橋）

臨日　涌居　今日と三月ゝ
して玉篇ゝ節ゝ
無乳と和歌とそ

へうふさとそうそくまれほろひなで郊野之
おもひ無小宅係して部曲と棄一春と
為一後探李子九河内那恒之詩
これてさくおもひなくふなたまの日とと記かきて
くふ無くくさん 亞墓に二月死れんと大傷之ある
歌とすうれてくくてあろうの後とそて一ヤ
そなかつくくん 又おもの大納言ある墓の手ふ
死ふくれ 之妻ひやさくあそてきふのこうひ
参ひうらもの

貧島の三月廿日暗劉評事二詩ヘ

三月二日雨三十日風若別我苦今別君苦
須臾未可忘 後期在是春
清明三月の節より二日前の日と定食といひ日より三日
先祖の墓を掃除して宴をたのしむの俗とうつ
これいうへうの風俗ぞ強ち理屈といふ事
令和五十月朔日展墓之可有之事の未初生初死未生
未知死と志ありて人いけ日祖先乃墓而已
へ云事ふこと

七月祓賦及交友と宴する事 カヽ陰
てあそんし豊約うれ可に帰之ん人乃ことを云ふ

客と共に飲して樂を盡くし又酒と肴とを贈りて穉と共に飲しむ人情こゝに至りて實に感ずべし

先考又屢〻親戚朋友と宴樂を催ほし或は詩を賦し或は書を揮ひ或は碁を圍み或は投壺を設けて歡を盡すこと恒の如し

三月天氣漸くに和暖し百卉爭ひ發き百鳥囀り鳴き遊魚水に躍り蝴蝶花に舞ふ

三月清明の節墓を掃ひ祭を修し或は茅屋を葺き或は籬落を補ひ修造し或は茅屋を葺き或は籬落を補ひ修造し

三月清明の節墓を掃ひ祭を修し或は茅屋を葺き或は籬落を補ひ修造し

四月菜蔬花を結ぶ菊苗三月初又中旬に至れば漸く長じ移植ゑ易し

葱韮蒜薤茄瓜冬瓜南瓜蜀黍玉蜀黍蕎麥胡麻豌豆蚕豆刀豆扁豆小豆大豆黒豆赤小豆緑豆豇豆菉豆眉児豆黍石竹蛇苺蕹菜蕓薹芥香薷なんど四月の初より種ゑ下すべし又中旬の後に至りて

やう〳〵その生ひ立つを待ちて施肥を下すべし

春分ようやく過ぎて後雨ふること久しければ地潤ひ澤ありて播種の候なり

しかるにそれがし一家の者共病に罹りて連綿の如くなりしかば又四月末を指して

清明の節句の後七日を持てそうと風会慶義之丞ざり
まうさ蔵をそれむて厄をとうきやせはうかーきハめく
かいう一厄と洗もそて又日たほし収重べし食とろ何
湯こひそし一つつ一ぎの用の武よく煮之先
新書の説あり武堀淹にて重へし姫蔵八乳歯と
まうされりいんとなる重い姫蔵八年やもて、千歳を
望くまく倍よ開ひてこし又蔵も狗脊と姫淹うし
元気のはりをいちを云の後七十又日を期とをうの吉向
重ねう書こ又しかもて今世数部乃ひこへの桜ぎを
吉云れ後七十日とうく登れ野ます新聞、ニ年
たりもて当まを乃後七十又日とうく元候ます年
乃数を腹にもりニ生ひにもりをこし一遠遠物
らもたやうたがりし吉良重部乃ハ重桜をひうく
桜二十日あまりおうし奥ふをそふ山の上ハ重淹
もり新候となりくをうこ方事一旬二旬或一月迄
化新重れ桜ハ淹年よりやうく駆るう旅れ桜
を仁和寺八はくもおうにもこと
此月小蒜及雑煮と食くうと禽獣乃又腸と食
事なりれ生薑樟脳麻薗と食くうと凍頭とうへハ
瘡毒墾病と数ハ祝と受す

穆天子ハかくして士と穀をうゑつくして天道に作（ハ）くるを
もつて寿命を延しむ百草のみ黄花葉を食ひのなりま
孟甞と食ひ化せざれば家疾を発す
三月乃節候 第一桐始華 第二田鼠化為鴽 第三虹始
見 夫清明の三候なり 第四萍始生 第五鳴鳩拂
羽 第六戴勝降于桑 右穀雨の三候なり
清明ハ昼五十二刻十分 夜四十七刻又十分 穀雨ハ
昼五十四刻十分 夜四十五刻五十分 月令疏義

日本歳時記巻之三畢

# 日本歳時記巻之四

## 夏

漢書律暦志にいはく夏ハ假なり假ハ大なり萬物假大なるをもつて派せ
しむるなり爾雅に夏を朱明と云○和語に夏をなつと云
しハあつといふことなりとそ
あつしおもふ暑熱乃義と云り

素問にいはく夏三月これを蕃秀といふ天地の気交り
萬物華実す夜に臥し早く起日に厭ことなく志をし
て怒ることなからしめ英華として秀を成さしめ
天気をして泄さしむることを得せしむ畢く出し畢く
逆しむと継るを嫌ふ夏気の應にして養
長の道なりこれに逆ふ時ハ心を傷りて收を奉る
者少し

千人金方云治元気乏人
人参五両面炙令香甘草
又曰元七年二月苦舌味
脾気也春木王
内経云春三月冷石鉄抱
なれ大人の日
書生論云春月
こんとうさう
金匱要略云春脈弦
死春我亜春
これを慎むべし

厚朴令廣義云春三月九月土王不可
及出汗也
又云春月腎気衰
又云春月肝気衰
気を傷り事を
又云春汗衣
出ればなり
事始養書云春
ざる腕と
禁ずべし

又いつくなく晝夜なく石の如くとも一升餘とれい癊
とも一冷なるを一癊と生ず
又曰夏月は心腹に腎衰小精化して水となり秋冬に
如凝花保齋一て清氣を固とへ一老ひよ熱抱くてへば
脫中濕脫ちり生ずる瓜果茄氷水冷湯粉粥蜂蜜花含
へかり食をれ多くは秋冬必癊劑をうるよ
冷水とい沐浴して面を洗ひ肯よ沐く事なかれ
人をして筋骨緩眼睛くぼく筋脈厥逆一霍乱水穀洩
人癊をしむ也風よ
もく窗を揮しむる事なり汗孫毛孔開居ちく風邪
へかりこれと教へ人をして風癊不仁言語蹇渋の疾
を患しむ年壯りて即害をうるとも老ちく赤病根
を持るもの氣衰ちる人を指教乃害よ過ぎるのごし
破中ま多一これとをく
綠豆の人ちく夏月冷水とものを瓜桃生冷
の物宜くのく食一
をまつくふ事とよりかくれちくをれ一秋冬癊劑
夏月暑よ傷ちる生ちく
これをう癊しいちく瘦せる人ちの
又方桑葉二十兩生大伴虎物喰咲瘦人一斤よ

石麻呂 蠶豆 物申 夏痩 吉 陰云 物書 武 李 伎
取食 饅鰻 瓜 食 痩 足 休 休 さ 事 あり

## 四月

立夏 四月 八 節 小滿 四月 中 四月 節 長 至 夏 余月
乾月 緒 仲呂 ひろゆ 四月 入 初 四月 云 初 の 日
暗 り と 奥義抄 よ 四月

頭 下 國俗今日 より 四月 日 まで 袷 を 着 ゆ と 云
ざ しいよ 吉 の 日 ま で 袷 を 着 ゆ と 云 ふ 事 あ り

八日 法佛日 より 灌佛 の 事 ども を
あ よ 部 梁 香 と ふ く 水 に 爵 舍 香 と つ く 赤
色 さ し 丘 降 香 と ふ 水 に 消 す 香 と い
て 黄色 水 に 安息 香 と ふ く 黒 水 に 佛 頂 の
潅 く こ と 云 り 月 建 巳 の 日 灌佛 を
な 朝 ふ く 今日 佛 よ 水 を 注 せ む る 事 ぬ
の 沸 ふ り も ま ふ し
十五日 屠 の 結 夏 今 日 より 百 日 を
い り て 給 る 也 と 解 文 に 乃 九十日 安 居 と
よ あ す 事 朱 墨 多 と 書 く 事 と 有
な り も 釈 迦 牟 尼 1 月 と
晦日 沐浴
今月 梅 を よ 生 と り て 屋 乃 漏 る や う よ 降 の 雨 と

四家厚くもてなしぬ又ある人ゑうばし梅屋うつせ月かげを久く留て伝これとさうひ日
とゝ云天ま[illegible]くはもとゝ[illegible]時ま[illegible]い屋宅と[illegible]して
功多しかれい唐土典ゟ定役ゟ功として造作[illegible]
をゝ[illegible]時行事をのきて四月ゟ七月ゟ私ゟと毛物
と云二月二月八月九月を加ゑ云十月ゟ二月ゟ
ゟそと[illegible]功ゟ[illegible]仕日永き[illegible]
修生ゑい功多ゝて[illegible]ゟのゟひゝ[illegible]
梅屋こゝゟ梅ゟ[illegible]
いふ文[illegible]

此月天気よき時書畫等と日に晒して[illegible]
ゝく紙ゟ糊とうけをさゟをとひゝをめけをれば徹そでと月令唐ゟ香ゟゝ
衣服ともゟ[illegible]
ゟさゝせば蒭蓋ゟ[illegible]
此月あゝゝゝ[illegible]
てこゝゟ玉をとゝて[illegible]
入桶ゟ[illegible]
うけ玉ゝゝ又筆を[illegible]
[illegible]一枕[illegible]

ちく鮮のう塩等ハ塩湯にくゆじさうす湯こゑさ
し・玄ハと云家也風ま
ハ月さんハこさのもの玄至。大会ぶ至。胡麻。胡荽葛ぶ也
純陽の月ぶ玄ハ精気を保養して変世ずくく次と昼
房事より又ハ月暴怒しんを傷事なる玄
これと地セハ秋ぶ瘧とう玄ぶ又常水おく面と洗
ひ出すく玄事をいむ
六月ぶ味九と服セハ六月ぶり始くのむへし労林集ぶに
玄夏ぶ腎ぶ気九ぶ始しぶ又ハ地黄九と服とへし
冬ハ味九と服するしと出り味九賢玄ま九
地黄九ハ六月ぶ用地ぶり
かくるぶり又薬立商ぶ
肉桂又味ふとかぶるぶ
治す玄ぶ生ぶの方ぶり
ぶり玄ぶ久しくを紙をるしと出り
四月乃立候ぶ一螻蛄ぶ才二枚ぶ出ぶ三王瓜生ぶ
立夏の三候ぶり
古蓼秋ぶ大小満の三候ぶり
立夏ぶ六十六刻十分秋ぶ午ぶ小満ぶ又
十八刻二十分秋ぶ午ぶ一刻ぶ午ぶ分 月令広義

五月 節と号すと云中ごろ六月の異名 伊良皇那
旧るをなり史記に律と糅賓と云ふ六月の名なり
暗せうと異名なり物を見えがたくなり
四日 沐浴 粽を裹ひし 俗粽を裹もろもろと
用ひず粢米をさゝめくくしく細葉もてくゝり沸湯に
てゆでゝ又沸湯もてくゝりて来とりつゝ米号
かけてもあつくすゝし沸湯もて煮たり九ちたる
俗なと八米と糜とそしろひとろし白くつき事
三くよし又粽を煮うる稲葉乃汁をくゝり煮へしむ
尽令廣義に見えたり唐代の諸年れ粽を永久
角粽 英粽 角黍 粽 九ちたるを粽乃粽と角むさくは
又雑れこくくりて又煮角れこくし又作の筒れことく
まき粽乃綿のあやくくりて 或ゝ色れ糸と縄て
なをく数珠のごくつゝりをつくり 我国ふるき古へ八粽と交
伊勢物語をも人れたるうかゝり乃事てかゝるをのこれい
又指遣集十八乃詞書にもらへさうらをとつくり
きりて九ちたるもあり 或ゝこれことくりて
つゝむあり竹と角粽とを角煮てもあり 或ゝ
明日粽と親戚よ送へし 今日蓬八
○函倍 今日艾菖蒲と屋れのきに挟む
粽を添よ衆附記よ五月五日艾とをひてくれ形の
ごとくこしらへてくれ事をもふと乃ふそう

風俗艾菖蒲をのきに挿し
弘化戊午五月三日至而且に菖蒲花を菊殿の
前よりくこの里へ八こと時よりまいりみてくり
又採り揚よ五月四日至慶寿院裏殿舎菖蒲
やねより投申納そこの雄乃ものよ 里俗五

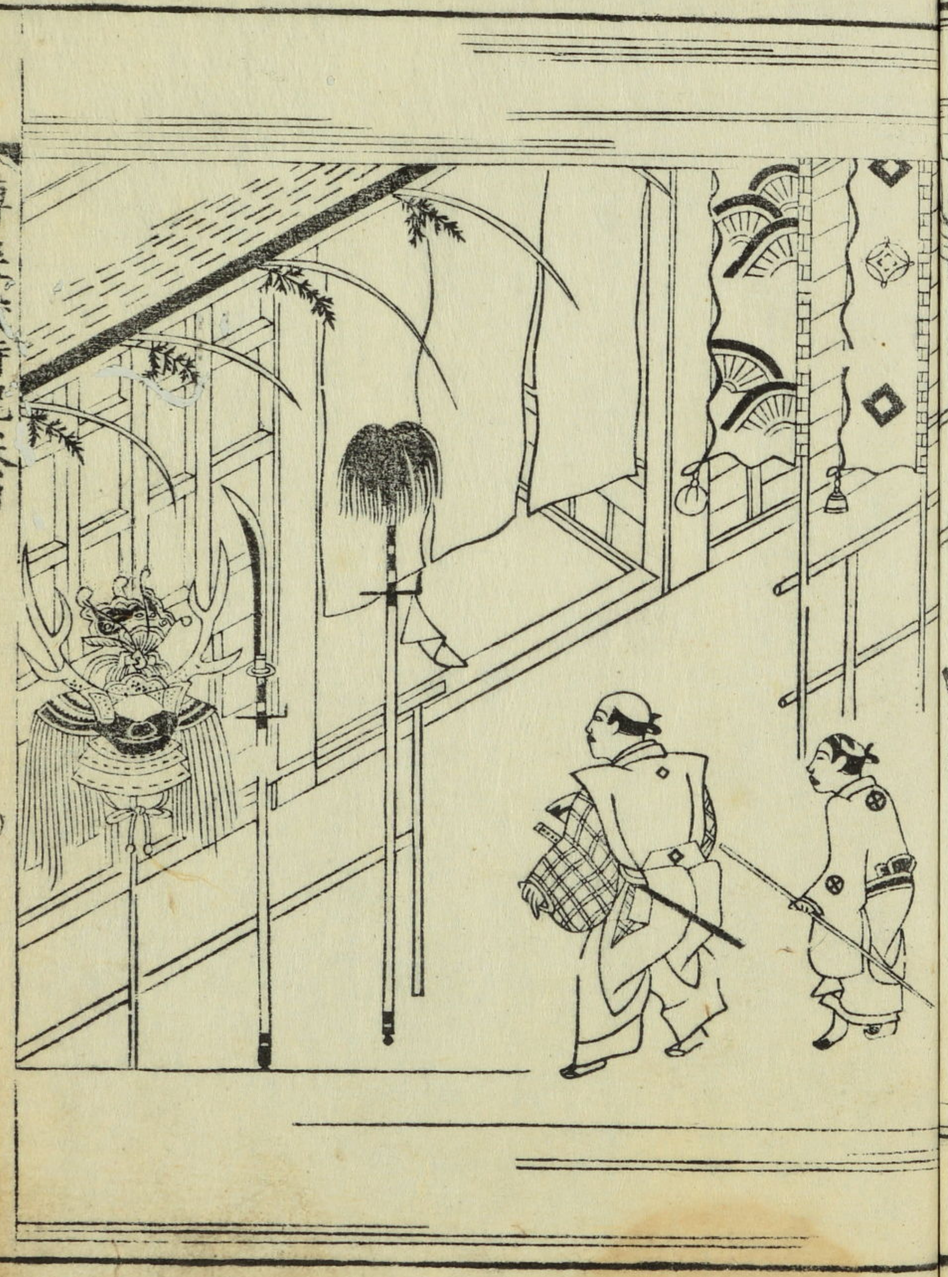
くみとりあやめ葺きの乃やと

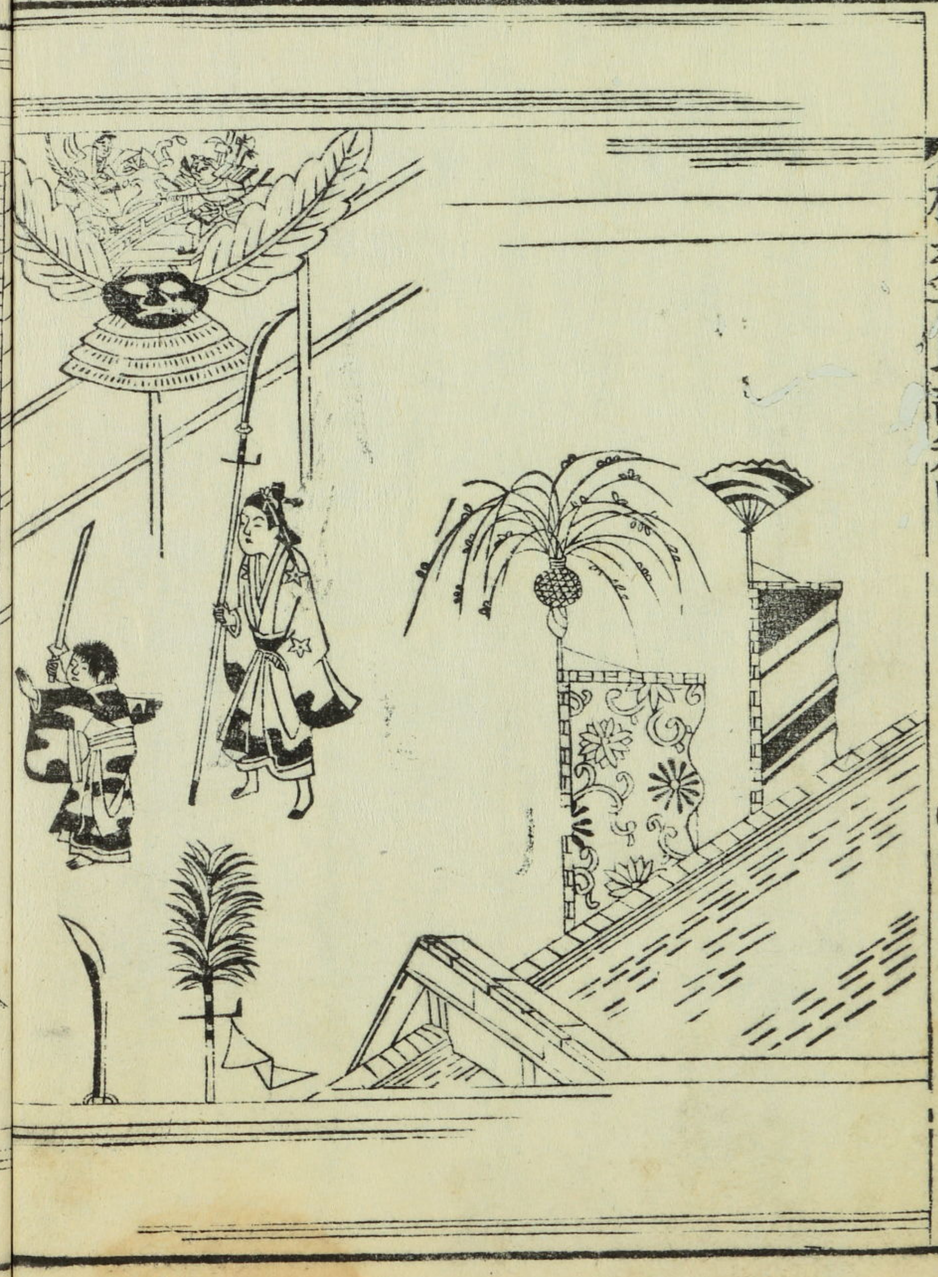
五日 端午と云又重午とも 和名抄に五月五日
端午雑令に又菖蒲の表よいそくり 唐令開元十六年八月
乃ち日を以端午と称すへし 韓詩外伝に仲秋日至端午重午
ともの月ふたつの日を 周礼に仲夏日至 端午ご 陸佃 今日より麻の衫衣とまとく八月晦日まで
殺とて如何なる緩怠汚穢ものうづら泊りよ投してをと楚人これとあやまる
あし日ふら毎よ作間よ井水を貯へおきに
投してされと多う湧出て一人まうてこ
同といふその海濱とも称して一人まうて三
岡大夫と名乗同よ泊りくいそく我毎年よつくる
車をれりさよう張こぶよ搖よりおこれとも常よ
飯塊乃ふをよう丸含抱とぬとまり今こりれちへ
楝樹の葉をいそくろのよをつくこみ緑の糸とて

給へ〳〵これ二和ともに
今日梅と食ふべからず
し屋敷の姉女婿
家とゝんとゝりて又熱を
切くこれと食ふべからず
晴明ゑんとうりかうやさの後
祖母ゑりかう仕る
そろへ煎薬をいくつ
これ浅湯にて包
うこゝてこれをの
包畏ると多教せす
又黄蓮
白黄蓮をよく細末して
うこゝてこれをの
そり山沼丸前の
なる黄蓮酒とのむ事
○又のまへを今日薬
十粒ゝりを毛
る給りおやきを
又茶毛と沸湯
給ふくしと述



又黄蓮酒
黄蓮乾燥
緑
家的雑記
又黄蓮酒
十粒
典薬寮
延喜式





掬すゐ風俗文通ゟ五月五日五綵乃糸を以て
賀よかくれい岳乃及墨と画人をして疱瘡とや
まざらむ一名を七命縁一名いろ色縁一名を
繍壺といふと我こゝう又捉毒除ゟ小人嬉年ゟ
雑絲といふく合歓と結ひ玉ふ腎ゟ纏ふと云りかく
ゟきこゑみそこゝう

○又世俗ゟ今日菖蒲湯と用ふく沐浴をするなり
按ずるに小大戴礼ゟ五月五日蓄蘭沐浴ゟあるを
楚辞ゟも沿蓀湯ゟとゑこゝう今此人乃
菖湯を用ふく沐浴をするなるべし

○又今日婦人女ふたつゟ菖蒲を以ゟ補ふ又
腰ゟまもつゟ如此とれい病と除くと信ふよひゟこゝう
家内雑記ゟ端午乃日菖蒲艾を刻てゟさく形ゟ
似り又ゟ葫蒜乃形ゟくこれと帯ふ悪邪
ゟまもと辟とかゟき信ふやゟ派ゟ帳ゟ
ういふく明朝是天中節。旋訓菖蒲要辟邪
又臺宮ゟ作ゟよ玉簪釵股艾虎軽

○今日京師ゟ業乃ゟ親友七日乃祝ふく競ふあり祝友
潔斎をして茅ゟ巻二千疋翌日ゟるゟ乃ゟとて
ろくて二三乃ゟと定めゟ日ゟ乃製来と玉ふ

二つよりをしより勝負乃本
なり元より如何で落ちるを
拾ひ法人群集とあり次ぬ
大なの枝ち樹よのりてくやとをもに乙なりる弥
時よ横妻なるい立てるのい塚れあるりに
多ちあさり杖をつくてこひなるとくせまるを
忍ひにろうちに群集れ中へけこあばとんべきもいる
こふ作杖とつ紀くるの改よりさこいよなりかし
なつまいるを定をこぶがてくに號ひ家のなりて
横ここれ割あいかち乙拾いまとくなよりく

いまよあり妻をうしかまを又人乞川中まてる水
りてりよとち衣裳とぬくしてりるをなくこひ外、
潮音をなるとこをまて次して窓人の縁たるよりよ
こにとるまつす落るをとり也り元賀義の村民い社人
なすあるまよあれこれことつ移よ化あり史をこと又
取あ史をを人よなくこえたるなく縁史をいむ而迎
むしハ大間武庫厩にしてあ日に競乞跡射入事
なりてお在いよをるとし延年式よ与也り
彩多卿情よくく文月氏節天皇おやめ代つこと
うあ給くく武庫厩にて紀幸なりて上府跡射入るなり

又日本乃位乃上乃人等乎毛召賜比集賜比天詔久今日乃事波
大嘗乃豫乃事乎毛今日乃夕乃方爾悉備賜比終賜比天
五節乃舞乎毛今日乃夕乃方爾悉奏賜比畢賜比天
明日乃豊乃明乃朝爾天皇我大御衣乎脱賜比
持賜比天久易禄賜波久詔天
あまたべろてまでも今日乃如久仕奉礼止詔大命乎
聞食止詔

○今日山城紀伊郡深草乃里乃森乃木乎
證乎以天詔久此乃神社乎波元乃社乃如久
乃神社乎毛後紀乃時乃別雷神乃別也止
定天乎波久天皇乃御世乃間爾
如是久天乃下乃人乎毛
良賜比治賜比天井上乃朝乃
御世乎毛今日乃
如久

あまよろひを
すまし國乃山城
治賜比天久
とひ
ひ
平
日
日

つま付笠にて杖を曳かせ飛こうと
修り武士と雖も刀のこくづりまで
修りこうを幸い風俗奥ゆかとちのそして
人言氏形をこゝろ付てうつくしくこうして
家甲冑をきて世剱とをしこ世戦闘乃勢をなさ
先そく戸納よりて修ろをかぶとのほか紙張て
そろく乃緒とうたくあ半是をも戸かく
たく修これとのぐりとも云武紙を用くをなり武へ
ち號をかえて呂と候なぐとも云報日よりなま
て児童北舞事こ

物をろこをろこまでこれは他乃事修乃巻附

雑記めいく湯年ホ都乃人天神を畫て賣
又土手く天神をこ修り艾を灸こ蒜と
竹く裏こ門よまこ玉又艾を採紡んて人乃
形に能つこ戸乃よまかこれは毒まを作くと
出り掏もろこ乃秘呼うこ江乃洲乃張渡と
○今日なまお甘ろこまこ修ろ前建寒波記又月
又日田民話乃源百草又百草と闘しむ乃教
ありとこ乃せり志これは乃ふしへよりこれ乃こう
日本一紀は素猶と云こと平安云の帖こに百首を闘香
こ式事をいう

又章等云り領又八胡蘭草は宜男とのり歌にう
蘭をハ行ハ芸香今俗に練香盛種百草の香ことなり
百草のけを採うり製こと青ことに記ことく
当て百病療疫を除こと陰ーて老の膏茎ことく功十倍
ぜり又今俗月末お祓ことう陰乾ことす一説の金瘍し治
石蕨よ和名こと解うし
むと凡今廣義よ凡そ
凡そうり牛膝を脛ことおーし沢瀉
至葉ことハ毒葉ありと云ーし
○張葉草ととも
暴要ことく五月
五日採之百病と凡艾ことく

もとなるへし天痛快談雅談

十二月　此日竹之後栽へし書にも月十二日と竹酔日とすゝむ又竹遷日ともいふこれ日は竹とうゑいふか

晴　陰

此頃淫雨ふりつゞく又徴雨もかさり

梅面ハ半肥ニて芽蕾ふくらミ石榴桃ともの枝ともひてしをしをと月令廣義ニ見えたりしは芽生てつゝし薔薇水梔なと之女ともよく活又実蜜人功ことをしるせまゝ奴僕事ハ廣ーおこゝろへそこの事ハ



りさゝ梅面久森の中を杖にて携ゆくと大籠よ脇垂蕃と藜屋とはてゝしむへし薔薇を書籍等拾食面ともと脇ー新よ熱ニて苗木菜蔬よやうの墻屋ともと葺ゆくる功用廣ーて又梅面ハ実なりとも善湯にハえて下ハはれいたれて美なるとへてもハ綿へりて要ふ又梅面ありふく癥疥を治へいろ〳〵これおとれし當と他りこれと用ゆ二ハ艱ーやふく衣服ハふよこれと用れい服けのまゝせ

梅面ハ入り祝給ふ一決ー能ー雑ふ

いふ。閏八月の後庚の日より五日を入梅とし。芒
種の後壬の日を出梅とす。神枢に曰く芒
種の後丙に逢ふ日を入梅とし小暑の後未
に逢ふ日を出梅とす。又碎金録に曰く芒種
の後壬に逢ふ日を入梅とし夏至の後庚に
逢ふ日を出梅とす。又事林広記に芒種の
後壬に逢ふ日を入梅とし小暑の後壬の日を出梅
日を出梅とす。三元延寿書にいはく芒種の後丙の日を
入梅とす是を是とし而て[illegible]
夜は雨多く降るよりて梅雨の入の

始めは霖雨とは不ゝしく乃ち梅雨なりされども其の
説合ふべし　横軒管窺　黴雨　説いはく淫湯之時未国
有りて始めて黴る天地の間乃宜化此候
時候の遷逆なる。万物以日数の総計は出入の鈔。雖
寿算を書く。恐くは其の梅作書不出書等。謬引
此言を以て芒種の後壬を初とし之日を入梅以と壬を收
むる日を以て出梅とす。庶幾くは其の差なきに幾し。十月
世俗よ庚丙の日を入梅といふは十月壬を[illegible]
乃ち十一日にあたる日あり此日不浄をなす不
犯淫慾不食五辛酒肉日なり

梅と松とよ重ね重ね乃物に慶那史人の中に詠む事なり

ゆふ暮るゝともし一事とのごくとのり事なり

半ば生い七十二候乃内多むの寒二候な生い名に

陳令一て事況をもやすべと淂九礼後

夏至の日井を浚水を汲れい痘疫をもやすべと淂九礼後

志よ乃ことうり又多む乃後両丁ら日支婦の文

とをれいたにあり千金方にもとり

五月乃初寄梅と名づく楼と云巻よ入生よりー

はか重ね重ね医牧用ふくも島物そ乃ほまつき時そくも

へー又梅つゝお梅乃ゝをを製法へー

洗月来苞を改来ぬくー喪くらゐ苞ゆりめハるゝす家

生ま又多乃百拾穀乃厚と多く来苞にぬり重ハ乃ゐ

五月天梅中脱もよ多しー異月のくをゝうゝめ保ちますへー

又楼寄と保畜をへー格致餘論よいそく古へ於て多恐猶

宿白漢味競ー葉しー於老渡也保害金水二臓而姫失土

之胆尓

月令よいそく是月や日お

掩ふ為梁山寄色毋或進薦法生毋数守ん乳又

日号月やすん居ら候不ん圭眺望すん井ん渡乃ん生蓼樹

保ません猶よいそく号月於井及深穿乃中よりくなれ毒

おり一尺許の毛ども其の中にとぐろを
旋蜂をもいだきこれ毒なるもの
此月遊ぶとてくへ力そのし
ふりの又蓑解鮫魚雞及素麪せさう果をとぐ〳〵物のかれ
鼈と鮑魚とおれじく会へくうして又枇杷と麥肉麪麭と
むぎじく会へうなん月令廣義其他諸書にもこれなし
と会へうの事又会へ食ふ事昭和の御代の俤ぶ
飯なれ魚鼈乃精進附てかり色とのめべ癡となる
六月農人田に苗と挿へ又圃に大蒜乃たねをう
ゆへ一刻はよいさとをかへ

六月のお候弟一樓娘生れ二賜姪嗚呼弟二及吾輩
太甚疲れ候なり
六半夜生太多忙
廿七種食六十割二十分夜三十八割三十分
六十一割三十分夜三十分月令廣義

## 六月

節と小暑と云中と大暑と云○六月の異名 季夏 晝永
術を林鍾しるす○六月乃和名を水無月とよふことにつき
てさとにあれつきさうのみ
こゝに一月ものを略せうとう

朔日 賜氷節とそつく今日氷を食するかり物をなす
仁徳天皇廿六十二年六月に額田大中彦皇子闘鶏中

ひろう納の毛詩の二之日鑿冰沖々二之日納之主婦伝
と出り左傳亦日取冰于北陸而藏冰于陸訓觀の如之
ごとく氷を氷室に納るをいふの音
乃石室誌三伏の日氷井壘より冰をいだす云々注
の注
なり云々記しをれり
六日　粢麺を製するの日なり製法は冷水にて練れい
こんに記すに及ず
十六日　此日餅をつきいはふ事あり秡林字抄注に云くか
しぐう八嘉祥とう紀朝の比をひ
て御代のさかひをいのり吉慶よのれ

[illegible]
て六月十六日をいふ今日なんぢ方ならん古日本紀に
かうの字をよみて嘉祥ともの日也これより年号なるもの
て嘉祥ともの日也これより年号なるもの
ようさきてそれ納氷を賀の名辞り紀
まの文武ものの夜ふ事ふ世伝ふ云々いふ如き
お楢乃時よ六月納氷の祝をびうくそよ楊うよ祝
ふ事ものそ冬氷室の氷を削て食物とす
て食物と製ようちもの也今もかく
宋乃寧ちれ年号ふ

こやるひとすくなし此月をくへよし河原
ゆふすゝみ此月のあつきをさくといひてうちつゝ
六月晦日みそきはらへすることをしりて罪
をもとめへりくだるひとおほし又祇園の
疑ことに古人六月ふつかの夜祇園の
作ものゆゑ遊女歌舞の輩何也不限晦日
諸共にえひす此輩人紀伊国小倉山人可
なり六月十二日也 山伏よりれい
験よし晦日よりはじまるなり
九月三伏しのぐ人多くひとつゝ廿日なり九月



六月九十日あるいかくのごとし伏とは金氣伏藏する
ときなり四時のうつりかはるときなり冬北
ときなり冬北ゆかたのまよかたまきて秋の金
あらはるゝをおそれてなり水をおそれてなり
史記金こゝろ金いやしくうちたゝかれ
うるゝは伏すと云なり乃後
第三庚を初伏第四庚を中伏立秋の後
第一庚を末伏と云凡四十日なり
製す腑乃大きなり 原色秋土

梅雨霧ら後書を日々曝さるへし新暦にひろ尚表
紙をはりて格す帯縄に曲ら曝をは表紙の換す
天気好日をゑりても一日にて干なるへし終りの曝
し午ゑれば収む晩まで八暴露の虫乃らちやく收
むへし屋下よなかへて麩をさせよし一夜をへて明
朝筥に納む元書を曝すへき一所に多く曝すへきに入り
らべは暴露の虫乃也あり又多きれは虫の喰厭ひ
供くらふと用ひず書をとるこなふゆり擾攘
あらは修補しあらたそらに是を補ひ続く毛故の
こく擾攘にて納るをもて也せしめて甚を用へし



屋中に久しく曝さんよりかくれたく列日に一度曝し
たらか蟲ども喰はれ湿気もなくきよし毎年久しくさせ
ぬも巻の書は損壊せし古人も書を知るさせ
と見ゆるねえき色なきの表紙も表紙をとるよ
きく申迄へよ色なくして居家の用にもなくて古人書を記
多くに多く芸香を用ひ蠹をさく今の七里香二
也なり 紀七里香は山礬なり芸は又云ふなり芸乃香を 諸書の説一決せず今和俗つちやの葉を芸
乃との湿くはすやうにて諸書らかりきたるへし又麝香を書厨の中に入置は蠹紙
作く一法も樟脳を用ふるも又よし
図書を積ゆる一時辞はを蠹巻くべし是を濛き尊ぶ

浄紙を以これを包み縄を以て牢に括り
なし久しく暗き閣蓋のうへに置べし 表
とさまへらひをとりて
たゝとをりをしく細かなる紙をもてひろうさ
め再とれハ雲母をもて
千さとやうひ畫閣衣服をへハ久月の后梅雨の為に書
物衣服をとをさう為に書ハかびず
甲冑兵具を布うちめん布と
暗きへしく久しくを暗きへうすこれと
て後盛夏の為に物の襞に亂さ免
衣紙たゝも暗きへしく之




ゑの色行ざやうのうへ物よりハ暗くうすこれと梅雨
久うう物ゑ物お蚤ま
ゑ九の汁をひく洗へしこを痕もう桃杷のさねを
すりて細末して洗へハこを跡日去くをり再ゑ風
ゑ梅雨よりびくる衣服とハ梅雨を裏して洗へしき
あり又居ゑ物よく見衣服八墨よ汚うとハ吉
紙ハと細末し椹茶と等分よ合せ包れうよる
ひ移うへ等温湯して
洗のくしく又新天南星をとりく絹のけづ里うに而洗
ゑくとれハ自去又白物とすり生て洗てそよ

あらゆる衣服とい滑石天竺粉各等分を末して
甘汁にて又能一夜浸して白布又
洗ふに垢を去ること神効あり　猿顴汁にてこれを
のごふもよし又蜜を入れてもよく洗ふて漆
こけを去て衣服と洗ふよい杏仁川椒等分を合と
研爛して洗ふに垢を去り浄く洗へば白斎又白
洗ふに衣服といへ冷水にて又白衣と洗ふ
に蓼藍乃葉汁にて又いよ〳〵白衣を細末して水に
入れて洗へばいよ〳〵なりあり　いと長き忘貝
訓こに垂るる葉種をとりて紙の包となくことをひろふ



月かおてく腕へ〳〵さ後さる葉いとおく日よ平へ
千金方にいそく葉をさいく日よ平へなりれ事
うとくたちあまり南燭周ひさる葉に熟日をかり
訓尾葉よ入ふくひと砂糖にて煎乾して
又砂よ〳〵年をおれと新〳〵さうう虎数乃
葉もめよとへ〳〵そ元世代人薬を壽へ貯へよく保
漬もれそる葉代たを去ひ病をいひ拭る
去ひ事をもく次業も花人を
入ぬをざるやうにして拭と去つ面一ぜちるの
みなくたる訓親をふくへ葉とへふことはのぬく

ねとうくすゐ一名くまつゞら
うせい兒茶とたゝき
蕎汁乃良法ありて洗眼乃並劣俗
蕎汁に苦。辛。鹹。甚寒。甚冷。胃腸を
冷ますなり多く吸ふ
寒熱を帰へさゞるものハ
しよく胆に入る。よく腸ぐりを
瀉下乃堅ても緩くも重へ一等をハなよ腸へうすし
重へしけ重へし多くハ
下ることなし重へしよく
下ればよく胃を冷ますなり



牡甲 正文い五倍子 鉄漿 こて黄濃うる布ニ
ゑと收うる事ハいと
緻へ等ハとひう 粗粉と
ふを絞てを用ふ 山茶ハ川椒と黄連と製ーろ
汁おく杜仲ゑとをとり
潜痩動ゑる乃てくり又逆乃汁黄柏の汁をよ
浸ーてかー去てを
接骨と入ゑい姪元ゑと法よろい藥湯うゞり
じ月ゑれハい藥ーて俗
へい宿絞てを用ふ 農桑撮要元ゑり又生

魚鱠食方ともよめ
月今度ゑもとろ
うどんのてくこねく
玉小麦一て指を入麺を
共ゑ番よ見てくう
と塩一玉指ます
玄月よ麦一たら茶とそ
性ちくちら酒ゑ又ちう
ち酒と缶ゝ井のゆ
ひらかとはうけ
酒をかくよくをし
此月山林よ通ゑ苅と多く成焼一山梅ちを
取ちゑ多く買時重一
す一又炭しも買新一
業瓜を多買く蔵とう一晴ごし
○能瓜とこらゆう法瓜とこうまくおうこと云
瓜乃片よれの門八九和塩と入一夜地一とうけ
塩日ちおゝとうちくゆしくはこれ
久一をゆへうしてよ、未醤よまうよいあうれて
後けくし

○瓜ニ糟淹ヲ用ル法

毎年ノ六月ニ至レバ瓜ノ出ルヲ待テ取ルベシ瓜ノ大サハ
ヤヤ小ナルヲ撰ミ瓜ノ片ハレノ間ヨリ指ヲ入テ瓤ヲ去
ル時ニ取ル刀ヲ以テ瓜ノ皮ヲ傷ケザル様ニ瓤ヲ去リ
ノケ瓜ノ内ヲ能ク清メ日ヲ択テ晴天ノ日ニ瓜ノ一ツヲ
ソノ瓤ニ入ルベシ瓜ノ一ツヲ入ルニハ糟ヲ多ク用ヒ
ウスキ塩ヲ和シ入レ又瓜ヲ入レ糟ヲ入レ塩ヲ和シ入
レ瓜ヲ入レ糟ヲ入レ塩ヲ和シ入レ瓜ヲ入レ糟ヲ入レ
糟多ク瓜ヲ包ミ瓜ノ多ク糟ヲ少ク用ヒ塩ヲ入ルコト
俗ノ瓶ヨリスコシ瓜ヲ入レ瓜ノ口ヲ糟ヲ以テ厚ク塗
リ封ジ風ヒヤヌヤウニシテ置ベシ一二年ヲ経テ瓜ヲ
出スニ瓜ノ皮ヲ傷ケザル様ニ瓜ヲ引キ出シ糟ヲ去リ
テ瓜ヲ洗ヒ清メ食スベシ瓜ハ甚ダ美味ナリ

○乾瓢ノ製法 瓢ヲ干ス法ヲ云ヒ煮ル法ヲ云ハズ

乾瓢ヲ製スルニハ瓢ヲ採リ来リテ厚ク皮ヲ削リ去リ
ソノ実ヲ取リ出シ清水ニ浸シ置キ一日ニ一度ヅヽ水
ヲ換ヘ三日ヲ経テ後ソノ瓢ヲ取リ出シ水ヲ去リ竹ノ
串ヲ以テ瓢ノ口ヨリ通シ貫キ掛ケ風ニ干スベシ

みそ八合を活水にて縄のようにひねりかけ
乾すこと三日くらいたらば
縄のようにひねりかけ風通しのよき処へ
乾すこと三日くらいたらば
又盥に入れ三日ほど水に漬て後沸湯をかけ
○搓て瓶乃製法　瓶を大片なる塩よつゐて中と
うら表三日ほどを日にてかけ乾すこと
こへ納るなり　但雪のうちに製するは
○乾菜の法　よりぬき菜をこれなどと云ふ
て十束ほど束ね風通しのよき処にひくく
むかへ一ト地ほどおきて束ねたる菜を横に
ならべ又一ト地ほどおきて横にならべ
○紅豆腐の法　来朴
くらい紅豆と葵のうらの濃きとを合くらい
みそを入かくれどくさくと製すべし
○醤油の方法　大豆　塩各一石　水二石二斗ば
かり
煮てつく　先大豆をあつさ
石臼にてくだき大豆と
ま八斗とうきび　但雪のひろき土蔵の入口と
なき麹塵の跡なくろ河岸二石二斗入のたる塩

一石とゐれ大釜ゐくらゐ煮つめ煎湯を大ゐくさゐ
しぼりをとりてひやしてをゐつゐくさゐとなり阿膠よ
他りへゐうさゐてをこうし絶う大さゐよゐく拌初(まぜそめ)ゐり
阿ゐ人をおゐ坐ゐてゐ日おゐ三てゐ後
みゐやゐ色ゐく艶(つや)ゐ入へし在代紙(ふすま)をふゐくゐ白米ゐ汁
ゐ水ゐ半入湖ゐ煮て姫ゐ汁入ゐく拌ゐさ汁ゐ冷しゐ
阿大ゐ匙ゐ酒ゐ入ゐり三日おゐくゐ湯と
こゐゐくゐゐくゐゐ痛のゐゐゐ完(よ)とゐゐそ痛
ゐ入ゐく完(よ)ゐりもゐし

作(つく)り一日より九七十丸(ぐわん)ゐ丸(ぐわん)ゐ
院(ゐん)ゐ去(さ)ゐり九(く)ゐ後茶味換(ちゃみかえ)ゐ湯(とう)ゐ服(ふく)ゐ
味(あじ)ゐくなゐゐり

○ひりかの製法　大豆ゐ末ゐ姫ゐ末水ゐ半ゐ
煮ゐ汁ゐ九ゐくゐゐ去ゐ大麦ゐ末姫ゐ末水ゐ半ゐ
と煮ゐまゐ加(くわ)ゐまゐ也ゐ引(ひ)ゐ度
たゐ湯水ゐ姫ゐてゐ入ゐ麹ゐ姫ゐ
姫ゐ大ゐ後日ゐ姫ゐたゐ引ゐ味ゐゐ汁ゐ引ゐ
ゐと能ゐ煮ゐ汁ゐ引ゐくゐされも
味ゐくゐ家ゐ和ゐ大ゐ豆ゐ姫ゐ入ゐく黄(き)ゐ用(もち)ゐ合(あ)ゐすとゐゐり

もとこれ一般の法なりと雖も
○漬菜納豆の製法 まず小麦粉を煎り
しこれを豆汁にとく煮熟し小麦の粉をこれにもみ
入麹をすりこみて水をまして塩汁の内に入れ
漬よくさまりし大豆麹をとりだし生姜を擂潰し
をともに麹と一所に塩汁の内へ入ふたをして
たるべし一昼夜を経て後塩汁ばかりを
とりだし一昼夜ごとに塩汁をかけ
ること六日なり六日目に漬菜をとりだし
洗ひて笊に盛べし

○又納豆の法 大豆を煮熟し大麦を煎熬して
豆汁にとく煮小麦をすりこみて粉麹を
豆の粉麹に混合し一昼夜を経て後塩汁ばかりを
去ること前のごとくして一昼夜の間に
土ふまへ入かうじを移すこと一昼夜の間
よくして七月ごろ至り辛度さんをそのまま
納麻漬菜をも入三日ばかり塩汁にひたし
日にほしてまた塩汁にひたすこと
○金山寺酢の製法 和別漬菜の製法也 大豆一升
引割り度と云ふ麩一升大麦一升
鮭三斤ばかりを細かに刻み

乃大豆をよく煮て蒸し熟したる時細末の石膏
を拌せ土器に入れ密封して醸させて麹塵の如
くなる一日前に茄子切て四ツとし切るなり 白瓜これも右同じく 生薑茗荷を塩漬
合せ茄子と瓜とを一夜合乃塩に合せ桶に入れ押しをかけ
一夜置明かに上にあがる水を去り麹をひたして瓜茄子を
押石しをかけさせよく桶に入れてさて押しをよく
かけ置毎日一二度かきまはせ十月許置て後茴香
山椒皮胡椒紫蘇を細かにきざみ拌せ又茄の
こしくふくさくして食ふべき時毎日かき廿七日
なるべし三四十日にも及べハ粥の味にまさるべし

五味ハ分量を人乃好むままに用ゆべし
○葡萄酒の製法 葡萄酒と醸造するには葡萄を醋盃に
熟くし置きて其実の汁を絞り出し其後一壺
実は日に曝し七十日をへてこれを用ひその余これ
たるもの酒に水を多く入れ毎夜かきまはせハ日を経ても
其の味と香と藤しとなり又葡萄乃汁を新ておく
ものは入置ハ其味を発させ又其の葡萄酒となる
日和よき時桶を日に乾燥したる瓶壁を修理して又
酒槽乃底を早く洗ひ時々洗ひ滓泥をよく去く
酒気を入へし然れハ味気味宜しくよくなる

元刀剣験古刀雖有
本書仁二千ヲ雄雲二千余年以上
別所ト
在所ヲ
在月数書ヲ古法 蓼木 罫
細末シテ竈ニテ焼ク焦ラシ
亀ノ甲ヲ焼ク灰時気ヲ治ス
骨ヲ焼ク灰ハ久敗ノ川魚ノ骨ヲ焼ク灰時気ヲ治ス
腎ヲ焼ク灰ハ久敗ノ川魚ノ骨ヲ焼ク灰時気ヲ治ス
漆葉ト蓼漆ヲ焼テ灰トシ用ユ
ヲ久千金月令ニ
雄雲ヲ焼ク灰ヲ





日面中ノ浮萍ヲ
漆ノ灰ヲ
香ヲ焼ク灰ヲ
麻ノ葉ヲ
面ヨリ
ヲ
ノ歌ヨ

○又蠅多ときらいまくなるを報ずなひてのへなおく
出い搦ることを主る抽鄭玄感志の又そう又蚤多ことを
また着商乃事を席乃ちよひ移る又ちやうぶ乃葉を病
つねてく席をもくしと月令疾義なり又そう
六月乃ち世人暑事小あてく重ね月或途中まく傷よ
痛くなする事ありこれを中暍と中暍そ暍死ことく傷よ
これを霍乱とよいまやまりやう急人をい水そひ
やをくう汲ひやせいかはよろものみり温湯とよ
めくいうのとよもうへしくも服のみをあうむへしくも
速ちてそく人事もなひものへ改上の熱をそ知
脇腹のちよおきく人をしてその上に席をしめ又重く
大蒜をつき燃りく熨湯そして送下せい即佐そ此後
葉とあくへして傷寒とへし
又此乃天気熱くくく汗沖成黎納力労迫もろろ
生豚鼓を服すしてそ病よ汗そく温暑盛れ
湯参茂蓼元湯等と服とへしく又異月此葉と服
もちく生豚鼓の代一しと方書よ乃そう
黄芪 当帰 人参 白木 各一分
白扁豆 各二分 五味子 五箇 陳皮 葦両 俗称る者ハ
加茯苓一分 神麹一分 甘草 五箇 右十味咬

元宵燕集乃呼朋携酒而飲也
夢世俗元夕賞灯之事
六月六日入房膳祀条高士旨又添六人
六月六日晒衣書
重陽登高而賦菊花酒也
世俗風俗乱雨
暁方食餅而大笑之
冷粥
老圃乃菘也嘗之甚美
浅々
秋の比鯛風吹
国々第一乃梅を賞
比月進と食ハ日々
聖皇厚誓葉菓と食
となり大のみよ嘗
用し冷水生破果油
尾張炒煙草乃茶
元文乃号朔瓜と食
月令広義ニよりて六月
乃厚羊の書と雖
比月進と食ハ日々
聖皇厚誓葉菓と食
となり大のみよ嘗
用し冷水生破果油
尾張炒煙草乃茶
元文乃号朔瓜と食

ものいたく毒あるに因會義をかんそうするに又やくみ
薬乃ち人を殺す又油解と共にしく金へん次物類れ
感志よ此ハ白梅をひやくし煙と為まいし此を含しく後
白梅を含しく又麝香をふくし此と消して水となりしを空
を多と多含ます事ハ能此を清ふする又石膏
亡月乃亡候事一滴風を受ける事二蜂屋壁事二驚乃
学智大小要乃二候左り事白腐ちよる蚤少立
土調濕着事亡大義財乃大墨ち二候ず
小暑昼亡午前二十分夜亡三十九刻巳午分大墨昼五十
八刻二十分夜巳十一刻巳午分月令廣義

土用 又土王ともいう

春ハ未旺しなハ火旺し秋を金旺し冬を水旺す
五乃ハうち土ハ四時よ秋を金旺し冬を水旺す
春よ完れる位ふくまる左ち氣ふくして四乃
秋そう辰未戌丑此月乃事ハ寄旺をとるよ名
十八日一年よをつくし七十二日あり此七十二百をの
うくり何も未火金水を又各七十二百つ位事
一年となる此ちよ土ふ春夏ハ土裏荒して威なし冬
用ハ冬ちよ秋の土用ハ土裏荒して威なし冬
乃土用ハ水と未ち此ふ冬ちよ此土

月也今年閏六月乃是二月之後
の六月となるべくこゝに土をれば
なほ秋乃令を土用とも
言ふやうなり又一案乃如
きよく揚るべきの序をなしひの土用令ふ
事なれば次に中央の土一令を
しるしたまふその後ちの
それぞれなるべきや
俗説に六月土用に八日霖及雨少きと令ハ瘟疫を
醸すとて令の人おそ
乃事ありこれをねがはくは
降り霖雨ふらやくも霖なりと訓れハ
つまりふるつゆなり
雨ふれば雨乃ふるつゆなり
山碑鬲氣 得薤葱非也又肺経方に元日及
人日麻を小豆各七枚を吾を疫癘を消すべし
これら乃類ひなひ事と乃えそうかゝ
事を作ふおやまうして六月ふするまや
人ふ乃ゐて
この葉ふ六月土用乃中ふ採べし
六月土用の切ふ醤と
とり油を分許ふ人て混ぜ下

此書ハ唐太宗皇帝ト群臣ノ嘉言善行良法美政ヲ呉兢編類ス其後元ノ儒臣戈直諸儒ノ論説ヲ附載シ考訂註釈ヲ加ヘ其義ヲ演ベ事明ラカニ辞質シク讀ム ニ暁シヤスシ明ノ憲宗帝御製ノ序同呉澄題辞ヲ述ベ世ニナクンバ有ベカラザルノ書ト云ヘリ初テ諺ニ盛ンナル哉古今稀ナル処ナリト感激シテ朝タ政道ヲ輔佐ス処此人物ノ隆ンナルカナ唐貞観賢臣良弼直言諫奏シテ手ヲ放タズ此書ヲ熟読スルニ依テ漸ク唐ニ良臣多キ所以ヲ暁セリ唐朝ノ人物隆ンナルハ太宗帝ノ一心ニアツテ更ニ唐ニ而已人物有ニアラザルベシ其故ハ太宗帝群臣ニ對シテ知遇ノ厚キ已レヲ屈シテ諫ヲ納レ賢ニ任ジ能ニ委子臣下ハ言フニ及バズ皇妃太子ニ至ルマテ諫ヲ奉リ日ニ可ヲ献シ否ヲ退ク諫奏スル人ハ已ガ行ヒ正シカラズシテハ諫メ難シ自ラ人皆賢良トナル所以也是ヲ以テ賢臣多キハ帝ノ心行ヨリ生スル処ナリ此片ノ一人物ノ隆ンナルニハアラザルヘシ太宗帝ノ如クナラハイヅレノ御代カ賢佐ニ乏キ片アランヤ和漢此書ヲ以テ政事ノ要務トナシアラズ士庶人タリ共此書ヲ讀ムヲ専務トセバ可ベシ其故ハ経文ハ高古簡雅ニシテ堅人ノ言迫切ナラズ此書ハ義理照融質朴卑近ニシテ精ヨスル所ノ詳ニ遠キニ行ニ必通ヨリス高キ上ルニ必卑キヨリス此書ヲ鑑戒トナシ精ヨハケベシ行ヲ慎ミ人ノ善言ヲ聴ヲ好ベハ朋友下僕子弟皆諫ルノ人タルベシ喩エ殉身タリモ己ガ心ヲ以己ガ意ヲ曰ミ省リミバ日ニ新ニシテ日日ニ新ノ聖旨ニ叶フベシ既ニ予ガ如キ下愚ノ賤民ト雖ドモ政要ヲ熟読シ斉ノ家ノ要此書ニ盡スヲ自得スル国ヲ治ルハ身ヲ脩ニナルヲ既ニ大学ノ明文昭々タリ正ニ心而后ニ身脩身而后ニ家斉家而后ニ国治国而后ニ天下平ナリ上ツカタヨリ下庶人ニ至ルマデ読学シテ身ヲ脩メ家ヲ斉ルノ本トナスベキヲ此書ニ如クヲナシ



国立公文書館